

近世前期南関東における分割相続と家

——武蔵国久良岐郡永田村——

福 田 ア ジ オ

はじめに	4. 家の成立過程と分割相続
1. 地域と史料	——南永田を中心として——
2. 中世末における永田郷と検地	(1) 田畑の分割と家数の増加
(1) 永田の開発	(2) 南永田における分割相続
(2) 後北条氏領国下の永田郷	5. 村落構成と互助組織
(3) 天正19年検地と永田村	(1) 課題と方法
3. 近世村落としての永田村の展開	(2) 南永田の村落構成
(1) 戸数の変化	(3) 生活互助組織
(2) 家の内部構成	(4) 系譜関係の歴史的な存在形態
(3) 村落構成	6. 結 語

はじめに

日本の近世社会の成立を小農自立の問題として把握したのは第二次世界大戦後の日本近世史研究の「成果」である。周知のように、小農自立を近世成立の指標にすえたのは「太閤検地論争」で主役を演じた安良城盛昭⁽¹⁾であり、それを定着させたのは佐々木潤之介⁽²⁾であった。1950年代・60年代の近世史研究は小農自立論を軸として展開した。そして、実証的研究が必ずしも伴わないまま、小農自立論は通説化し、研究の中心が他の問題に移って以降は、近世理解の枠組として定説的な位置を獲得した。70年代以降はこの小農自立論の理論的な深まりはないし、実証的小農自立論もほとんどないが、用語のみは広く流布しているといえよう。それほどに問題のない、解決済みのことなのであろうか。通説化したことにより検討されずに今日まできている問題も多々あるのではなかろうか。

必ずしも十分に検討されずに通説化してしまった問題の第1は、小農自立の小農の具体的存在形態である。安良城によれば、小農は「1町歩以下の耕地を保有し、その農耕は、基本的に単婚小家族の家族労働力のみ投入に依拠し、主として鋤・鎌の人力農具を以てする小規模農民経済」⁽³⁾のことである。この説明により、小農は単婚小家族のこととされた。すなわち農業経営体としての概念である小農が具体的には家族

はじめに

形態に置き換えられたのである。安良城理論では農奴が小農であり、小農は単婚小家族である。しかし、なぜ農奴は小農なのか、農奴＝小農がなぜ単婚小家族であらねばならないのか、さらに単婚小家族とは何か等の諸点は非常に不明確であり、十分な説明はない。しかも、小農自立政策はあっても、その結果として自立した小農の姿はどこにも示されていないし、いつそれが登場したのかも分からないのである。その後、佐々木潤之介や朝尾直弘⁽⁴⁾によって小農自立論は展開されたが、そこでも小農の具体的な姿は明確ではなく、単婚小家族説がそのまま継承されている。ただ小農は17世紀後半までに「満面開花」⁽⁵⁾するとして、安良城のいう幕藩体制第1段階の終期である寛文・延宝期の重要性が指摘されたことは注目される。

現在なお検討すべき問題点の第2は小農自立のプロセスである。小農自立がいかなるプロセスで達成されたかは、小農の存在形態把握のあいまいさと関連して、不明確である。小農を単婚小家族とし、この単婚小家族はいかなるコースを経て登場したかを追求する思考が一般的であるが、その場合に設定されているコースは大きく二つである。第1の考えは、前段階において隷属していた下人・所従などの農民が耕地と結合して1軒前の百姓となるというもので、小農自立のプロセスとして理論的に要請され、しかもふさわしいものとして主張されるコースである。第2の考えは、名主の複合大家族の分裂の結果として単婚小家族が成立するというものである。安良城以下多くの研究者は、小農自立の基本的コースは前者であり、後者はそれに随伴して生じた副次的なものにすぎないと考えている⁽⁶⁾が、これらの実証は充分にはなされていない。

検討すべき第3の問題点は、小農自立の過程が小農相互間にいかなる社会関係を形成させたのか、あるいは自立した小農が構成する村落社会の構造はいかなるものであったのかという、社会関係についてである。この問題についての研究成果は皆無に近いといってよいであろう。そのため、多くの研究者は、実証をしないまま、先学が採用した社会関係に関する用語を濫用し、恣意的に説明しているにすぎない。それが同族団論であり、しばしば「小族団的協業体」⁽⁷⁾、「族縁協同体」⁽⁸⁾、「族団制」⁽⁹⁾などと表現されているものである。これらの用語で示される社会組織がいかなるものについての説明や実証はほとんどない⁽¹⁰⁾。それにもかかわらず、小農自立の二つのコースのどちらの立場に立つにしても、必ずのようにその結果としての社会関係をこれらの用語で説明している。しかし、小農自立のコースが異なれば、当然その結果として形成される小農間の社会関係や小農の再生産にとって必要不可欠な村落の構造は大きく違ってくるものと予想されよう。

本稿は、1970年代以降の研究の空白によって残されてしまった以上の諸点を実証的に検討しようとする作業の一部であるが、特に第2点と第3点に焦点をあてて、関東地方の一村落の分析を行おうとするものである。

1. 地域と史料

本稿は近世には武蔵国久良岐郡永田村であった地域を分析の対象地とする。現在は横浜市区永田町と呼ばれる所であるが、市に編入される以前は久良岐郡大岡川村永田であった。

京浜急行が永田町の南端を走り、その東南端に井戸ヶ谷がある。また丘陵を越えた北側を東海道本線が走り、保土ヶ谷駅が近い。このような位置から住宅地化が急速に進み、今日では永田の中央部から西部に広がっていた丘陵地はほとんど残る所なく宅地になり、その北側と南側の谷間の水田のあった所もすべて住宅地になっている。特に北部ではまったく農村としての景観は姿を留めていない。現在では南部の谷間にごくわずか、以前は水田だったとわかる空地が宅地造成を待つ形でわずかに残っていることと、それらに面した所にサラリーマンの住宅とは規模や形のちがう農家的建築があるのみであり、そこにかつての農業集落としての永田の姿を留めている状態である。このような住宅地としての景観になってきたのは北部の方が早く、戦前からなのに対し、南部の谷間はこの20年間のことである(図1参照)。したがって、本稿の目的とする分析が可能な民俗の伝承は南部の谷間により濃厚であると予想される。

幸いなことに、景観上の北部と南部との違いは社会的な違いに対応しているのである。丘陵上にできている新しい住宅団地を別にして、谷間にある古くからの集落を中核にした住宅地は、自治会を北永田と南永田に分けて組織している。この北永田と南永田の区分は以前からのものであり、民俗の伝承母体となる村落としても別々の存在であった。そして、それは近世にあっても同様であった。この2区分は谷筋の違いに基づくもので、恐らく開発の段階までさかのぼるものであろう。そこで、歴史的に言えば、南永田という村落を調査分析の対象地として設定することになる。

永田の分析に使用する文書史料は現在横浜開港資料館所蔵の服部家文書である。服部家は北永田に中世以来居住し、近世を通じて永田村名主を世襲した家であり、その所蔵文書は近世の村方史料である。ただ近世前期に比重があり、中・後期は少ない。しかも、後期のは永田村全体ではなく、半数の家についてのみである。これは享保年間以降、天領(御料)でありながら、名主以下の村役人が2組おかれ、永田村を2区

2. 中世末における永田郷と検地

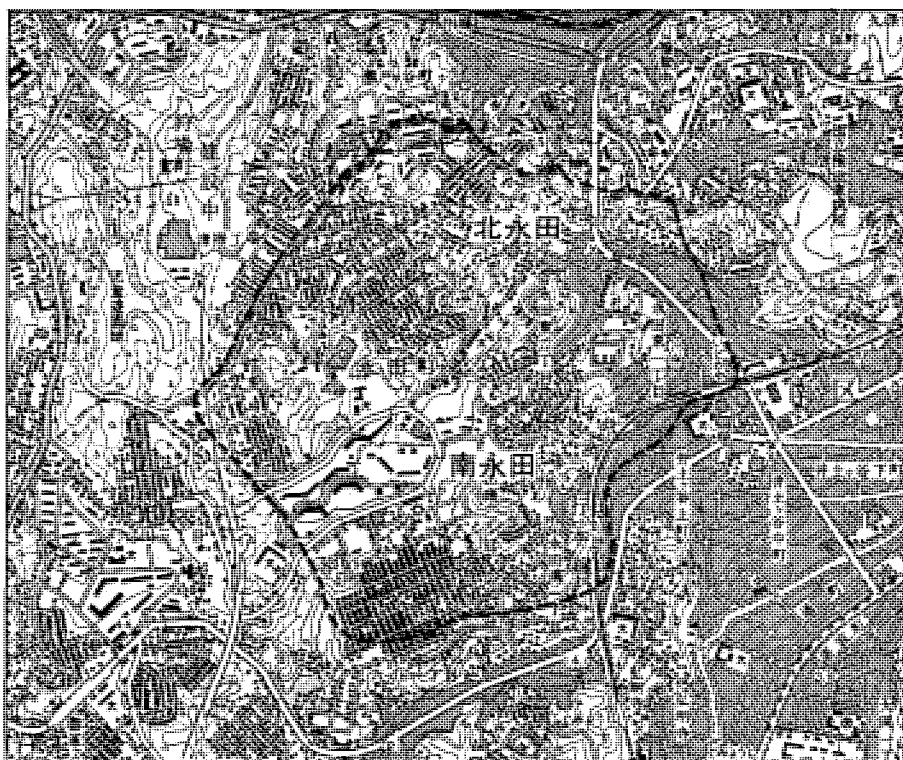


図1 永田町の現状（2万5千分の1地形図，横浜西部）

分して支配したからであるが、その2区分は北永田・南永田の区分ではない。したがって、18世紀に入ってから以降の永田村の展開は明らかにすることができない。その点で大きな限界をもつ。

この永田村を対象として近世史の展開を分析した研究はすでにいくつか青木虹二によって発表されている⁽¹¹⁾。また青木の分析に基づいて記述されたものに『横浜市史』第1巻（1958）がある。本稿は、直接的にはそれらの先行研究に学び、結果的にはそれらの批判をすることを通して、課題に迫ろうとするものである。

2. 中世末における永田郷と検地

(1) 永田の開発

丘陵地帯の中へ東側から細く入り込んだ侵食谷が樹枝状に多くの谷を形成しているが、すでに述べたように、基本的には北側と南側の二つに区分される。これらの細長い谷を水田化することがいつごろから始まったかは明らかでない。

南永田の長者谷という所に長者塚と呼ばれる場所があり、宝篋印塔の下部が磨滅したと考えられる石塔が立っている。これがいかなる性格のものはすでに中世末に不明になっていて、長者伝説と結合して長者塚と呼ばれるようになったのであろう。天正19年の検地帳に字名として長者谷があることはそのことを示しているし、『新編武蔵風土記稿』の記事も長者塚について記述しながら、その長者とはだれのことかは何も載せていないのである⁽¹²⁾。この長者塚には、また何枚かの板碑があり、年号は不明であるが、明らかに中世のものであり、この長者谷の開発が中世になされていたことを示している。

なおまた、『風土記稿』は、永田村の名主を世襲した服部氏については先祖を伊賀国名張の城主であったという伝承を記述しているが、いつごろから永田に居住しているかは不明である。

丘陵や山間部へ細長く入った侵食谷を水田化し、谷壁に家を作って居住するという形態は中世における開発の基本的形態の一つであることは各地の事例分析で明らかにされつつある⁽¹³⁾。景観上からすれば、永田を含む、この地域はそれと同一であり、板碑等の中世的遺物の残存と考え合わせれば、ここも中世の開発に基づく地域の一つであろう。この点は、これより後の天正19年検地の内容によっても逆に推測できる。

(2) 後北条氏領国下の永田郷

永田が文書に刻印を残すようになるのは、後北条氏の支配下に入ってからのものである。永田もその範囲内に入る久良岐郡が後北条氏の支配に組み込まれたのは、永正13年(1516)に三浦道寸・義意父子を三浦新井城に攻め滅ぼした時点である⁽¹⁴⁾が、16世紀前半の支配の様相はまったく不明である。ただ『小田原衆所領役帳』に「宅間殿五十貫文 久良岐郡長田 肥田中務丞」⁽¹⁵⁾と記されているだけであるが、この宅間殿も肥田中務丞もどのような存在か不明である⁽¹⁶⁾。

天正8年(1580)南関東を分国として支配する後北条氏に対し、北関東の佐竹氏はじめ諸大名が房総半島の里見、甲州の武田氏とも結んで、北条氏への反撃の動きをとる中で、分国全体にわたって北条氏は反銭の増徴を図った⁽¹⁷⁾。ここにはじめて永田が出てくるのである。服部家文書の中に次のような印判状⁽¹⁸⁾がある。

五貫二百八十文 永田段銭、但本増一倍□□当年可致進納辻

此外五貫二百八十文 従乙卯歳毎年御納致来

右先年無検地郷村、就 御代替、当年雖可被改候、其以来被打置、只今事六ヶ敷間、以段銭増分被仰付候、米穀計運送之苦勞可存者、員数相当次第、黄金・永楽・絹・布

2. 中世末における永田郷と検地

之類、麻漆等有合之物を以可納之、然者十月晦日必可致皆済、所可捧一札旨仰出者也、仍如件、

辛巳（天正9年）（虎朱印）

八月十七日

永田 代官
百姓中

これによれば、永田には検地は実施されなかったが、5貫280文の反銭を従来納入していたこと、そしてこの年にそれが2倍にされたことを示すものである。

そして、豊臣秀吉が島津征伐をして、いよいよ次は北条氏という、風雲急を告げる天正15年（1587）7月に、総動員令ともいうべき命令を分国内に出したが、同じく服部家に次の印判状が残されている⁽¹⁹⁾。

定

一於当郷、不撰侍凡下、自然御国御用之砌、可被召仕者撰出、其名を可記事、但三人、一此道具、弓銃炮三様之内、何成共存分次第、但鎗へ竹柄にても木柄にても、二間より短へ無用ニ候、然者号権門被官不致件役者、或商人細工人類、十五七十ヲ限而可記之事、

一腰さし類之ひらひら武者めくやうニ可致支度事、

一よき者を撰残し、夫同前之者申付候者、当郷小代官何時も聞出次第可切頸事、

一此走廻を心懸相嗜者ハ、侍ニても凡下ニても、随望可有御恩賞事、

已上

右自然之時々御用也、八月晦日を限而右諸道具可致支度、郷中之請負其人交名以下をハ、来月廿日ニ触口可指上、仍如件、

丁亥（天正15年）（虎朱印）

七月晦日

永田 小代官
百姓中

永田から侍・凡下の別なく3人を出陣予定者として登録するように命令しているのが、それは決して兵農分離後の武士ではなく、兵農未分離の状態の名主百姓の有力者をにわか仕立てに「ひらひら武者めくやうに」武装させて動員しようとしているのであり、それを恩賞で釣っているのである。苦境に立った後北条氏のあせりがありありとみられるが、その中に後北条氏の名主百姓を基礎とする権力の本質がみられる。「武者めく」戦闘員を3人登録せよといったことは、永田には当時そのような農民＝名主百姓がそれだけいたことを権力側が認定していたことを示すものであり、恐らくそれ以前に検地もおこなわれていたのであろう。そして、このような文書

が小代官を通じて具体化されているのであるが、永田では小代官を服部家が勤めていたことが、その文書の残存によって判明する。

以上の文書により、当時の永田では小代官の服部家を頂点にし、何人かの名主百姓がいたことが判明する。この何人かの軍勢として動員可能な百姓＝名主百姓によって構成される永田は郷であった。すなわち、天正18年（1590）3月に秀吉の攻撃をうけて伊豆山中城を追われて逃げた北条氏勝は玉縄城に入り⁽²⁰⁾、4月に支配下の村に次のような判物を出したのであるが⁽²¹⁾、そこに長田郷と出てくるのである。

加敗

右西国衆出勢ニ付而、其郷之者共可致治論候間、證文遣之候、当城堅固之間者、心安存、可相稼耕作者也、仍如件、

卯月日（天正18年）

左衛門大夫（花押）

長田郷

そして、氏勝降伏後の秀吉の禁制にも武州久良岐郡内長田郷と書かれているのである⁽²²⁾。

(3) 天正19年検地と永田村

後北条氏が滅亡した翌年の天正19年（1591）8月に検地が施行され、永田にも5冊の検地帳が残された。この5冊の記載内容を検討することにより、中世末から近世初頭にかけての永田の様相を把握し、本稿の分析の出発点を確定しよう。

まず表紙であるが、そこにはいずれも「武州久良岐郡小机之内永田之村」となっており、永田村として検地はなされていることが注目される。そして、その範囲が中世末における長田郷と変わらなかったことは、周辺に永田から分離したと考えられる村が存在しないことから推測される。長田郷のすぐ南は中世には多々久郷と呼ばれた地域であるが、この天正19年の検地に際して井土ヶ谷、弘明寺、中里、引越、別所、久保、最戸の7の小さな村に分けられている。その他の近接の各郷も、文禄年間の検地やあるいはその後の検地で同様に多くの村に分けられており、結局中世的郷が久良岐郡北部では14なのに対し、寛文年間には34の村となっている⁽²³⁾。このような中で、永田郷のみがその範囲を変化させることなく、郷から村へと名称が変わったことは、それだけ周辺村落よりも中世末の村落構造を検地帳上に反映させていることを予想させる。

次に記載形式であるが、関東地方の初期の検地にしばしばみられる分附記載がこの検地帳にはみられない。検地帳の各筆に2人の名前が記されているが、一つは天正期

2. 中世末における永田郷と検地

表1 天正19年検地帳の地積集計表

内 容 検地帳 地 目	南永田		北 永 田		屋 敷	計	
	第 1 冊 8月21日	第 2 冊 8月22日	第 3 冊 8月26日	第 4 冊 8月24日	第 5 冊 8月24日		
上 田	反 4.6.9.26	反 3.9.4.10	反 1.5.8.15	反 5.3.15		反 10.7.6.06	} 25.5反 6.14歩
中 田	5.8.22	3.6.0.22	1.0.3.18	1.1.5.26		6.3.8.23	
下 田	2.2.5.10	1.0.1.16		2.3.2.01		8.4.1.15	
上 畑	8.6.29	5.2.04		3.1.08		1.7.0.11	} 12.4反 6.16歩
中 畑	1.5.16	7.0.15	1.0.17	1.2.6.09		2.2.2.27	
下 畑	2.4.5.20	1.7.2.10	6.3.16	3.7.1.22		8.5.3.08	
屋 敷					反 1.9.4.03	1.9.4.03	
計	11.0.2.03	11.5.1.17	6.1.8.19	9.3.5.21	1.9.4.03	39.9.7.03	

の名前，すなわち検地に際しての名請人であるが，その上に書かれているのは別筆であり，その名前は寛永から万治ごろにかけての人名であることが他の文書から推定できる。したがって，当初の検地帳にはなかったもので，後筆であることは明らかである。それでは，1筆の土地を名請している1人の百姓は一地一作人の原則に基づく直接生産者であろうか。

5冊の検地帳を集計すると，まずこの永田の地域の耕地の広さとその生産力の権力による認定を知ることができる。表1がそれである。これによれば，耕地面積⁽²⁴⁾は38町歩で，水田が25町歩，畑が12町歩と，ほぼ2：1の割合となっている。完成した近世村落としての永田村の耕地は，田が27町歩なのに対し，畑が28町歩となり，その広さがほぼ等しくなっている⁽²⁵⁾のに比較すると，中世末の永田は水田中心の村落として存在し，まだ丘陵の斜面や上はほとんど森林のままの状態だったのであろう。水田の中でもっとも多いのが上田であることは注目される。天正検地における石盛は不明であるが，後の史料⁽²⁶⁾によれば上田14，中田12，下田10，上畑7，中畑5，下畑3，屋敷10であり，この石盛は恐らく検地に際して設定されたものであろう。この石盛は久良岐郡および北側の橘樹郡の中でもっとも高いものであり，現在判明しているのはこれと同じ石盛に水田がなっているのは両郡を通じてわずか3か村にすぎない⁽²⁷⁾。そのように高い石盛の上田が永田の水田の4割を占めていることは，永田が当時の段階でいかに高い生産力をもっていたかが推察される。中世末におけるこの地方の先進地域といえるであろう。

分附記載はみられないので，集計は単純である。まず，田畑屋敷の名請人別集計結

表2 天正19年検地地目品等別名請人集計表

	上 田	中 田	下 田	田 合 計	上 畑	中 畑	下 畑	や し き	畑 合 計	田畑合計	筆 数	1筆当り面積	字別一括名請率	田畑構成比グループ
二郎左衛門	2 ² 8.12	3 ² 2.20	2 ² 2.12	8 ² 3.14	3 ² 4.18	反—	6 ² 8.13	反5.04	1.0 ² 8.05	1.9 ² 1.19	13	1 ^反 4.22	38.2 %	D
金 左 衛 門	6.7.01	1.24	4.0.04	1.0.8.29	2.1.13	9.18	3.0.16	7.01	6.8.18	1.7.7.21	17	1.0.14	86.5	B
右 近	3.4.12	—	1.7.04	5.1.16	6.18	5.28	2.2.09	1.1.00	4.5.25	9.7.11	11	8.25	47.1	E
新 左 衛 門	1.6.10	—	4.8.14	6.4.24	3.1.13	—	1.8.26	4.23	5.5.02	1.1.9.26	9	1.3.09	40.4	E
西 光 院	1.8.15	—	5.20	2.4.05	—	—	1.1.01	6.00	1.7.01	4.2.06	6	7.01	43.8	F
彦 左 衛 門	—	—	—	—	—	—	3.22	1.0.00	1.3.22	1.3.22	2	6.26	70.4	G
若 狭	6.5.22	—	5.6.15	1.2.2.07	—	1.8.24	2.8.02	1.2.15	5.9.11	1.8.1.18	13	1.3.29	31.1	B
彦 三 郎	7.1.21	—	—	7.1.21	2.12	—	5.0.29	5.15	5.8.26	1.3.0.17	12	1.0.26	60.5	E
源 左 衛 門	1.2.3.22	2.0.21	3.9.08	1.8.3.21	1.3.22	—	3.1.27	9.13	5.5.02	2.3.8.23	15	1.5.28	65.1	A
弥 三 郎	—	—	—	—	—	—	1.0.15	—	1.0.15	1.0.15	1	1.0.15		
十 左 衛 門	—	—	1.9.08	1.9.08	—	—	2.06	—	2.06	2.1.14	2	1.0.22		
弥 五 郎	3.4.26	—	2.18	3.7.14	—	—	.24	—	.24	3.8.08	4	9.17		
和 泉	9.05	—	—	9.05	7.01	—	.24	—	7.25	1.7.00	3	5.20		
弥 次 郎	—	—	—	—	—	—	1.6.04	—	1.6.04	1.6.04	3	5.11		
弥 十 郎	—	—	—	—	—	—	1.14	—	1.14	1.14	1	1.14		
乗 蓮 寺	—	—	4.10	4.10	—	—	—	—	—	4.10	1	4.10		
将 監	—	—	—	—	6.07	7.18	—	—	1.3.25	1.3.25	2	6.28		
善 右 衛 門	2.0.16	1.3.04	2.1.03	5.4.23	—	1.3.27	3.3.13	7.20	5.5.00	1.0.9.23	16	6.26	91.0	E
清 右 衛 門	—	4.0.03	2.0.10	6.0.13	—	1.3.27	1.3.13	3.24	3.1.04	9.1.17	11	8.10	78.9	C
奎 助	6.12	1.4.04	1.1.24	3.2.10	—	—	7.02	6.24	1.3.26	4.6.06	5	9.07	30.6	F
主 計	1.3.26	5.5.24	3.0.08	9.9.28	4.24	1.3.04	3.8.06	3.05	5.9.09	1.5.9.07	25	6.11	57.6	B
善 五 郎	1.6.10	1.6.20	4.1.19	7.4.19	—	2.24	5.7.09	1.2.07	7.2.10	1.4.6.29	21	7.00	45.8	E
与 太 郎	5.1.13	1.6.28	2.7.15	9.5.26	—	2.0.08	6.6.24	1.6.20	1.0.3.22	1.7.2.03	18	9.17	19.4	D
彦 五 郎	—	—	6.29	6.29	—	—	2.12	6.00	8.12	1.5.11	3	5.04	40.9	G
四郎右衛門	4.8.07	1.3.04	6.6.25	1.2.8.06	—	—	4.3.05	9.15	5.2.20	1.8.0.26	17	1.0.19	46.5	B
兵 二 郎	3.9.21	—	2.0.14	6.0.05	1.0.08	1.7.06	4.1.15	1.18	7.0.17	1.3.0.22	15	8.21	26.6	E
兵 庫	3.3.00	7.12	3.6.11	7.6.23	—	8.14	8.20	1.1.25	2.8.29	1.0.5.22	11	9.18	60.8	C
但 馬	—	1.6.20	3.0.09	4.6.29	—	2.1.22	5.4.23	4.08	8.0.23	1.2.7.22	14	9.04	38.6	E
七郎左衛門	5.6.17	—	6.6.21	1.2.3.08	1.1.06	1.7.02	2.4.01	8.00	6.0.09	1.8.3.17	18	1.0.06	21.6	B
彦 六 郎	9.0.05	1.2.00	6.15	1.0.8.20	7.00	2.1.09	5.00	6.10	3.9.19	1.4.8.09	13	1.1.12	22.7	B
雅 楽 之 助	1.5.28	1.9.03	7.26	4.2.27	1.0.00	1.9.28	6.24	4.10	4.1.02	8.3.29	9	9.10	24.1	E
帯 刀	1.2.8.11	2.7.6.24	6.5.12	4.7.0.17	1.4.10	—	8.1.06	6.26	1.0.2.12	5.7.2.29	43	1.3.10	61.3	A
六郎左衛門	3.5.12	1.4.21	3.2.00	8.2.03	—	3.12	1.0.10	5.03	1.8.25	1.0.0.28	10	1.0.03	35.2	C
宝 地 庵	1.7.25	3.2.03	7.07	5.7.05	—	—	1.3.22	8.17	2.2.09	7.9.16	10	7.29	31.4	C
五郎右衛門	2.6.00	7.24	2.3.16	5.7.10	—	—	3.1.16	—	3.1.16	8.8.26	17	5.07	33.2	C
道 立	—	—	—	—	—	—	1.00	—	1.00	1.00	1	1.00		
善 七 郎	2.0.18	5.05	—	2.5.23	—	—	3.00	—	3.00	2.8.23	4	7.06		
太郎左衛門	—	—	—	—	—	—	3.10	—	3.10	3.10	1	3.10		
与 二 郎	—	—	—	—	1.05	—	—	—	1.05	1.05	1	1.05		
彦 八 郎	—	—	2.2.12	2.2.12	—	—	—	—	—	2.2.12	1	2.2.12		
与 十 郎	—	8.15	—	8.15	—	—	—	—	—	8.15	1	8.15		
筑 後	—	—	3.0.24	3.0.24	—	—	—	—	—	3.0.24	3	1.0.08		
内 匠	—	—	—	—	—	—	2.05	—	2.05	2.05	1	2.05		
新 六	—	—	.12	.12	—	—	—	—	—	.12	1	.12		

(注) 人名は検地帳における屋敷名請順。無屋敷の者は検地帳に名前が出てきた順。

表3 天正検地名請人別集計表

名 請 面 積	屋 敷 あ り	屋 敷 な し	計	
5 町 以 上	1		1	2
3 ～ 5 町			0	
2 ～ 3 町	1		1	
1.5 ～ 2 町	7		7	16
1.0 ～ 1.5 町	9		9	
0.7 ～ 1.0 町	4	1	5	5
0.5 ～ 0.7 町			0	
0.3 ～ 0.5 町	2	2	4	21
0.1 ～ 0.3 町	2	7	9	
1 反 未 満		8	8	
計	26	18	44	

果が表2である。この分析の指標として設定できるのは屋敷の有無と名請地の広狭であろう。それにより集計したのが表3である。屋敷の筆数は27筆で、その名請人は26人である。この26人はすべて田畑の名請人として顔を出している。屋敷の名請人としては名前が出ず、田畑のみを登録しているのは18人である。この屋敷登録の有無の指標は名請耕地の広狭との間に明確な相関関係を示している。無屋敷の18人は最高で8反8畝歩であるが、これも一人だけ特別に飛び離れて多く名請しているのであり、次は3反8畝歩になる。そして半数の8人が1反歩未満である。それに対して、屋敷名請人は、26人中18人までが1町歩以上であり、5反歩未満はわずかに4人である。

屋敷を登録しておらず、しかも耕地の名請もわずか1反歩未満という8名の人物はいかなる存在であったのかは、この検地帳は直接的には何も教えてくれない。このような零細な経営規模では再生産は不可能であるから、この面積が独立の経営単位を示していないことは明らかである。この場合、二つの可能性がある。一つは永田の他の経営に含まれている家成員あるいは従属百姓であり、それが「はまち田」として開発したものか、あるいは主家から耕作するように与えられていた田が検地に際して名請された場合であり、他は永田の近接の村落の百姓で、永田の中に出作していた場合である。1反歩未満の者の多くがわずか1筆であり、それらの字が永田の周辺部に分布するものが多いことなどから、隣接村落からの出作と考えてよいであろう。このことは、無屋敷で1反歩未満である名請人の中に、乗蓮寺というのがあり、これが永田の南の井戸ヶ谷村にある真言宗の寺院の名前であることから推測されよう。もちろん、中には永田の居住者もいたであろうが、何人かはこの乗蓮寺のような出作者であったと思われる。

2. 中世末における永田郷と検地

天正段階における永田の実際の経営単位としての構成者は屋敷名請人を中心にして、それに無屋敷の者の上層とでなっていたものと思われる。屋敷登録人のうち18名が名請地1町歩以上であり、7反歩以上になると22名となる。その最低は7反9畝歩であるが、これは宝地庵という北永田にある禅宗の寺庵であり、百姓では8反4畝歩である。これら22名は独立の経営体として存在していたものと考えられる。しかし、そのことは名請人がその耕地の直接生産者であったことを意味しない。次の寛永〜万治期への移行の中で判断すれば、名請地＝経営規模ではなく、相当の請作関係や給付関係を含んでいたものと考えられる。特に5町7反歩余を名請している帯刀にはそれが多く含まれていると思われる。

それに対して、屋敷名請人ではあるが、名請地が比較的少ない4名はいったいどのような存在であろうか。いずれも5反未満である。この4名のうち、1名は西光院という南永田にある真言宗の寺であるから除外して、残りの3名について考えよう。次の寛永〜万治期の名前との関係でみれば、いずれも屋敷を継承したものがおり、それは家として確立していて近世を通じて存続する。それら3名の耕地所持の天正19年から寛永〜万治への移動を把握すると表4のようになる。これによれば、3人の屋敷の後継者は寛永〜万治期に、1町4反6畝歩、7反4畝歩、7反2畝歩となっているのであるが、これは天正19年検地の際には他の名前で名請されていた田畑が、屋敷の後継者によって登録されるようになったからである。その中で、最大の1町4反歩余を登録するに至っている仁右衛門は、屋敷の名請では天正検地の彦左衛門を継承するが、田畑では無屋敷の弥次郎、弥三郎、弥五郎の3人の全名請地を継承している。このことは、天正検地に別々の人格として名請した彦左衛門以下の4人は実際には一つの経営体であったことを推測させる。それは弥次郎、弥三郎、弥五郎という名前の類似によっても判断できる。それに対して、寛永〜万治期の彦左衛門、作右衛門・忠右衛門の2軒は、屋敷は杵助、彦五郎のをそれぞれ受け継いでいるが、田畑の中心部分は天正検地の帯刀、七郎左衛門、但馬、四郎右衛門など名請地1町歩以上の者の耕地の一部を継承しているのであり、分附記載がとられたならば帯刀分杵助とか帯刀分彦五郎となったものであろう。この杵助と彦五郎は何人も名請人の耕地を継承していることから判断して、特定の家の従属百姓ではなく、永田の村内の有力百姓と請作関係を結んでいる小百姓と考えてよいであろう。いずれにしても、屋敷を登録していて、名請地の少ないものは、それがそのまま経営規模を示すものでないことは明らかである。それらはその名前以外で名請されている耕地を含めて経営している1個の経営体であり、そのような自立性が屋敷登録に表現されていると考えたい。特に、天正検地

表4 屋敷もち零細名請人の継承関係

万治		仁右衛門	茂左衛門	その他	計
天正					
彦左衛門	反 1.3.22	0	0	1.3.22	
弥次郎	1.6.04	0	0	1.6.04	
弥三郎	1.0.15	0	0	1.0.15	
弥五郎	3.8.08	0	0	3.8.08	
二郎左衛門	3.3.21	反 1.5.8.08	0	1.9.1.29	
和泉	9.29	0	7.01	1.7.00	
西光院	2.4.05	0	1.1.11	3.5.15	
その他	0	1.41	—	—	
計	1.4.6.14	1.5.9.22	—	—	

万治		彦左衛門	三郎右衛門	石左衛門	その他	計
天正						
空助	反 2.5.20	反 1.4.04	6.12	0	反 4.6.06	
帯刀	1.2.12	6.1.27	0	反 4.9.8.20	5.7.2.29	
七郎左衛門	1.8.26	0	0	1.6.4.21	1.8.3.17	
五郎右衛門	7.03	0	0	8.1.23	8.8.26	
善五郎	8.03	0	0	1.3.8.26	1.4.6.29	
但馬	2.00	0	0	1.2.5.22	1.2.7.22	
計	7.4.04	—	—	—	—	

万治		作右衛門・忠左衛門	喜左衛門	その他	計
天正					
彦五郎	反 1.2.29	2.12	0	反 1.5.11	
四郎右衛門	2.3.20	0	1.5.7.06	1.8.0.26	
帯刀	3.6.16	0	5.3.6.13	5.7.2.29	
計	7.2.05	—	—	—	

(注) 太わくは屋敷の継承を含むことを示す。

の彦左衛門が弥次郎以下を経営の中に含んでいたように、実際には無屋敷の零細名請人が屋敷名請人の経営体に包含されていた例は、この他にも多いと考えられる。すなわち、無屋敷零細名請人の耕地のすべてが寛永～万治期には屋敷登録人の後継者に継承されている例が14あり、無屋敷の者18人の8割を占め、1反未満は全員である。それら14人の土地は寛永以降は屋敷名請人の後継者により所持され続けられ、無屋敷零細名請人に対応した人名は一度も登場しないのである。このことは、後述するが、注目すべきことであり、零細名請人のうち他村からの出作者を除いた残りは、実際に

2. 中世末における永田郷と検地

は天正段階ではそれぞれ屋敷名請人の経営の一部を構成していたものと考えられる。これらの検地に際して名請された耕地は、屋敷名請人を家長とする家の成員の「ホマチ田」だったのであるが、それは自立する根拠地とはならず、家長の統制下でその家の家産に組み込まれ継承されたのであろう。

以上により、天正19年検地に表現された中世末～近世初頭の永田の村落構造は、26軒の屋敷名請人の家（内2軒は寺）と若干の無屋敷ではあるが耕地を多く名請している者の家とで構成される、30軒弱（内寺2）の村落であったといえる。その分3の2の21軒が7反以上を名請しており、さらにその3分の2は1町歩以上である。また屋敷登録人のうちの零細名請人も寛永～万治期から逆推すると7反歩以上の経営だったと考えられる。したがって、経営規模からみれば、7反歩以上の家によって構成され、その中で1町歩以上が大半を占めていた村落といえよう。しかし、経営規模が一定以上だから、すべて自立し、社会関係においてもフラットであったとはいえないであろう。屋敷は名請しているが、零細耕地の名請人である者は、先の圭助や彦五郎のように、村内有力者の田畑を請作しているのであり、結局そのような有力者との関係で再生産を維持していたものと思われる。しばしば屋敷の登録は役家の設定であり、無屋敷の者に対して一定の家格を意味すると説かれたが、ここではそのようには設定されていない。むしろ、従属的な小百姓も屋敷を登録されていると考えてよいようにみえる。

さらに相当規模の耕地と屋敷を名請している者の中にも従属的な小百姓が含まれていたことは、名請耕地の配置の様相や地目構成から推定できる。永田の天正19年検地による田畑の合計はそれぞれ25町5反歩と12町6反歩であり、ほぼ2：1である。古代以来の開発の展開はまず水田が開発されることで進み、畑は副次的であったことは明らかであり⁽²⁸⁾、天正以前の永田においてもそうであったと考えられる。すなわち、水田の開発がまず侵食谷でなされ、次いで丘陵斜面あるいは丘陵上の畑地化が副次的に進められた。天正段階で確認された耕地は、その後の開発の動向が畑の面積の増大により水田と畑がほぼ等しい面積になるという形で進行することとの関連で考えれば、浸蝕谷の開発可能地は大部分水田化され、丘陵の斜面や上の畑地化が次第に進みつつあった時点のものであろう。そこで想定されることは、水田を多く占めるのはより古くからの居住者で、逆に畑の比率の高いものは前者に対して後時的に定住し開発を進めたものか、あるいは前者に従属してその水田耕作に従事しながら丘陵上の開発をホマチ的に進めたものであろうということである。図2のグラフは、屋敷名請人26人に耕地を多く名請する無屋敷の者1人を加えて、田畑の構成割合を示したものであ

表5 天正19年検地名請人別字別面積表

名請人	字 名	南							永							田							屋 敷	計	(%) 字別一括 名 請 率					
		いとなわ	丸山崎	引越之台	わたなわ	房ヶ谷	ゆの木	長者やと	くもんし	みのわた	町 田	もりの前	うちかま	とのやと	うら田	神出前 神田前	西 谷	もりの下	だうの入	みやの前 向やと	北 谷	たかしま下				たうかいと	栗 坪	こかいと	上やと	ひかし かじやと
南	①二郎左衛門			3.0.21	2.4.00	5.8.20		7.3.04																			5.04	1.9.1.19	38.2	
	②金左衛門		3.20		3.13			1.5.3.22	7.07																		7.01	1.7.7.21	86.5	
	③右 近				4.5.25	3.3.07		7.09																			1.1.00	9.7.11	47.1	
	④新左衛門				3.8.24	4.8.14			2.7.25																		4.23	1.1.9.26	40.4	
	⑤西光院				1.8.15	1.25		2.06	7.10									5.20									6.00	4.2.06	43.8	
	⑥彦左衛門					3.22																					1.0.00	1.3.22	70.4	
	⑦若 狭				1.9.04	5.6.15		4.6.18	4.6.26																		1.2.15	1.8.1.18	31.1	
	⑧彦三郎	7.9.01							4.6.01																		5.15	1.3.0.17	60.5	
永	⑨源左衛門	1.5.5.12	1.0.15			2.1.03			1.8.22		5.13					1.7.25											9.13	2.3.8.23	65.1	
	10弥三郎	1.0.15																										1.0.15		
田	11十左衛門				2.06	1.9.08																						2.1.14		
	12弥五郎				3.4.26		24																					3.8.08		
	13和 泉				9.05	24			7.01																			1.7.00		
	14弥次郎					1.6.04																						1.6.04		
	15弥十郎						1.14																					1.14		
	16乗蓮寺							4.10																				4.10		
	17将 監							1.3.25																				1.3.25		
	北	⑬善右衛門															9.9.27				2.06							7.20	1.0.9.23	91.0
⑭清右衛門																	3.09	7.2.09	1.2.05								3.24	9.1.17	78.9	
⑯奎 助											6.12						1.4.04	1.1.24		7.02							6.24	4.6.06	30.6	
⑰主 計		3.23						8.22							1.3.26	9.1.22				2.8.23	1.2.04						3.05	1.5.9.07	57.6	
⑱善五郎		1.7.02													1.6.10	6.7.10		2.24	8.11	1.9.23	3.02						1.2.07	1.4.6.29	45.8	
⑲与太郎								1.4.12					3.3.10	1.2.04		3.1.02	2.7.15	2.5.12	1.6.28		1.05		2.0.20				1.6.20	1.7.2.03	19.4	
⑳彦五郎						2.12								6.09													6.00	1.5.11	40.9	
㉑四郎右衛門											1.5.06	1.7.18	1.4.14		2.8.07		3.18	8.4.05		8.04							9.15	1.8.0.26	46.5	
㉒兵二郎									3.4.24		2.7.06	1.2.15	4.21		2.4.23	1.5.23						1.3.28				1.5.14	1.18	1.3.0.22	26.6	
㉓兵 庫													6.4.09		2.9.18												1.1.25	1.0.5.22	60.8	
㉔但 馬																		3.0.09	4.9.11				3.2.15	3.01			4.08	1.2.7.22	38.6	
㉕七郎左衛門											2.8.15	7.00	3.0.14		7.00	2.7.00		3.9.21		8.14			.28		2.6.15		8.00	1.8.3.17	21.6	
㉖彦六郎									6.27	3.3.20	6.15	2.9.00	3.2.00		2.1.00	6.15										2.6.12	6.10	1.4.8.09	22.7	
永		㉗雅楽之助							1.6.14					1.9.03		1.5.28	7.26										2.0.08	4.10	8.3.29	24.1
		㉘帯 刀							9.2.17	3.5.1.02					5.5.15				1.9.10	1.5.00				3.4.09				6.26	5.7.2.29	61.3
田	㉙六郎左衛門												3.4.19			2.2.12	3.5.12									3.12	5.03	1.0.0.28	35.2	
	㉚宝地庵										2.4.27	5.11		2.5.01	5.12									1.0.06			8.17	7.9.16	31.4	
	35五郎右衛門			1.12											2.6.00	2.9.24				6.29		2.4.21						8.8.26	33.2	
	36道 立									1.00																		1.00		
	37善七郎									3.00		9.07	5.05		1.1.11													2.8.23		
	38太郎左衛門												3.10															3.10		
	39与二郎												1.05															1.05		
	40彦八郎															2.2.12												2.2.12		
	41与十郎																	8.15										8.15		
	42筑 後																	3.0.24										3.0.24		
田	43内 匠																		2.05									2.05		
	44新 六																			.12								.12		

(注) 字名は検地帳の記載順、人名は検地帳の屋敷名請順(番号を○で囲んだもの)であるが、①～⑨は㉑と㉒の間に記載されていたものを田畑の字名に対応させるため分離した。屋敷のないものは検地帳に名前が出てきた順。

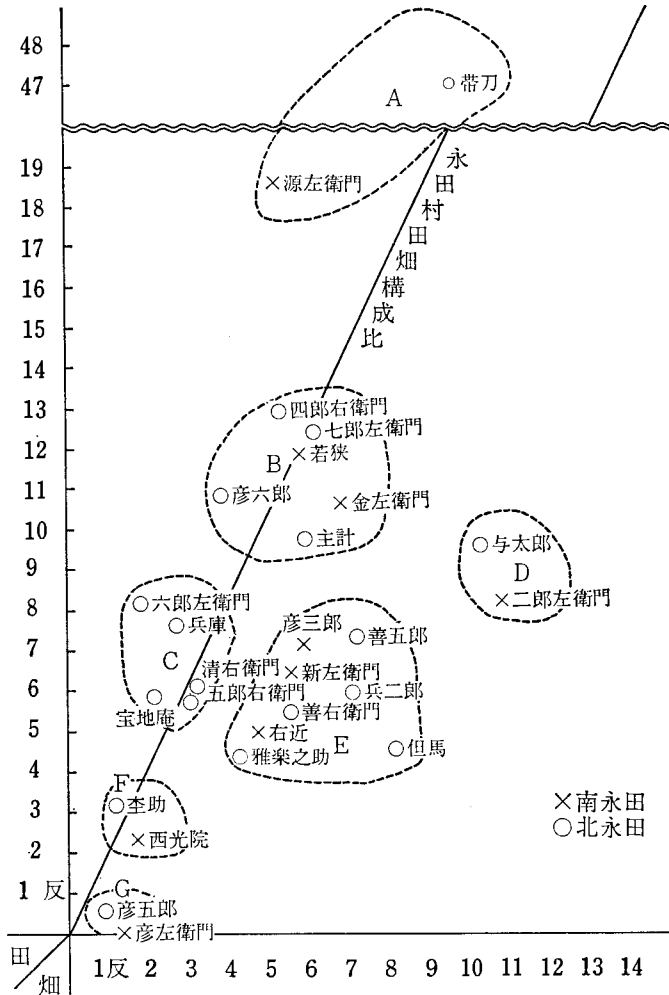


図2 天正19年検地名請百姓の田畑構成

る。これによれば、名請地が永田の当時の田畑構成の比率2：1にほぼ等しいか、それよりも水田の比率が高いのが15人であり、それに対して畑の比重が非常に高いのが12人となる。さらにグラフの上の分布から判断すると、それらは8グループに分けられよう。まず耕地の合計が多く、そのうちでも水田の比率が高い帯刀と源左衛門であり（Aグループ）、次いで永田の田畑構成とほぼ同じ比率で名請し、水田がほぼ1町歩以上という四郎右衛門、若狭などの6人（Bグループ）、そして同じように2：1でありながら水田の面積が5～6反歩の六郎左衛門、兵庫など5人（Cグループ）となり、以上の3グループは永田の田畑構成比とほぼ同じか、それ以上に水田を名請しており、最初に永田に定住し、浸蝕谷の開発を進めた家々とそれとの系譜関係をもつ家と考えられよう。それに対して、名請耕地の総面積は多いが、畑の比率が高い与太

2. 中世末における永田郷と検地

郎、二郎左衛門（Dグループ）、次いで田畑がほぼ同面積で、それぞれ5～8反歩を名請している善五郎、彦三郎以下の8人（Eグループ）が設定できよう。この2グループは畑の比率が永田の田畑構成比よりもずっと高く、丘陵上の開発を進めた家々で、前者よりは後時に永田に來住し定住したか、前者に従属した人々が主家から給付されて開発を進めた、あるいはホマチ的に開発を進めた結果が検地に際して確認されたものであろう。残りの田畑総計が零細な4人は、すでに検討したように、彦左衛門が実際には1町2反歩ほどの経営体であり、その内訳から判断すればEグループに近い存在であり、奎助や彦五郎は帯刀や四郎右衛門と請作関係を結ぶ小百姓としてあったが、その性格はEグループになるものと考えられる。以上により、当時の永田村の百姓はA・B・CグループとD・Eグループという二つに大きく分けられよう。この違いの意味は、さらに名請耕地の配置の様相との関連で明らかにできる。すなわち、表5のように、Aグループの二人は耕地の一括性が大きく、帯刀は全名請地の61%を字町田で名請し、源左衛門も同じく65%を字糸縄で名請している。このように全名請地の5割以上を一つの字で一括して名請しているのはBグループの主計、金左衛門、Cグループの兵庫、清右衛門にもみられる。しかもこの一括性の大きいものは上田を多く名請していることが表2から分かる。これに対し、D・Eグループは一括性が弱く、5割以上はEグループの彦三郎、善右衛門の2名にすぎない。残りは耕地を各字に散在させて名請しており、しかもそれらの耕地の多くは下田や下畑である。これらの人々は耕地をいくつかの断片に分けて散在させていることになるが、このことを逆にみれば、一つの字にある耕地は多くの者の耕地の混在という形になっていることになる。これは検地帳の記載がしばしば多くの名前を一筆ごとに変えて記載していることで分かるが、その混在させている度合は表6に示した1筆当り面積によっても明らかにできる。全耕地の1筆当り平均面積は9畝26歩であるから、1反歩以上の者はこの永田の標準以上であることを示すが、これによれば、平均1反歩以上は11名である。そのうち7人がA・Bグループであり、その一括性を示している。それに対して、1反歩未満は16人であるが、その内訳はBグループはわずか1人で、Cグループが4人、D・Eグループが7人となっているのである。CグループやD・Eグループは各字に耕地を散在させていることにより、一つの字内においてもこまかな耕地片を他の者の耕地と混在させる結果となり、いわば零細錯置耕地形態を示すようになっていくといえる。

以上のような諸点は決して偶然や自然の結果ではないであろう。後時に來住し定住した人々に対して、あるいは丘陵上の開発を進めた人々に対して一定の権力的編成が

表 6 天正検地耕地一筆当り平均面積別名請人集計表

1 反 5 畝 以 上	1							1	11
14 ~ 15				1				1	
13 ~ 14	1	1			1			3	
12 ~ 13								0	
11 ~ 12		1						1	
10 ~ 11		3	1		1			5	
9 ~ 10			1	1	2	1		5	16
8 ~ 9			1		2			3	
7 ~ 8			1			1		2	
6 ~ 7		1			2		1	4	
5 ~ 6			1				1	2	
5 畝 未 満								0	
1 筆当り面積									(平均 9 畝 26 歩)
耕地構成型	A	B	C	D	E	F	G	合 計	

なされたことを想像させるものである。耕地を一括して名請している A・B グループの者が、その周辺より低生産力の田畑を後時定住者や従属的小百姓である D・E グループの者に給付した。そして、それら D・E グループの者はそれを基礎にして丘陵上の開発を進めたものであろう。このように中世末における永田郷の社会的展開が推測できるのである。

それでは、これら生産力の高い耕地を一括して多くもち、従属百姓にその周辺の田畑を給付したり開発させたりして配置しているような有力百姓——A・B グループ——はどのような性格の農民であろうか。そこで注目されるのは名前である。この中には帯刀、若狭、主計などというのがある⁽²⁹⁾。これらはいわば武士的な名前であり、先に示した、後北条氏の軍事力の底辺を構成するものとして動員された兵農未分離の状態の名主百姓といえよう。この A・B グループの名主百姓は、すでに検討したように、耕地の一部を小百姓に請作に出し、従属百姓に給付し、そして残りを自己の家成員の労働力によって経営していたものと思われる。その家成員の労働力の中には多くの譜代下人がいたことは、これより 100 年余後の 18 世紀初頭の宗門人別帳に年季奉公人と共に多くの譜代下人が記載されていることにより逆推できる。

したがって、当時の永田郷の構成員は、水田中心に耕地をもち、他の経営体＝小百姓をある程度従属させていて、しかも兵農未分離の状態で領主化する可能性（先の後北条氏の動員令の恩賞はそれを示す）をもつ名主百姓（A・B グループ）、一部には名主百姓と請作関係にあるが、一つの経営体として個別的に存在している小百姓（C グループおよび D・E グループの一部）、およびそれら名主百姓に何らかの形で支配され、編成されていた従属的小百姓（C・D グループの大部分）であったと考えられよう。

3. 近世村落としての永田村の展開

そして、さらにその下に独自の経営体を形成せず経営体に内包されてしまっている家成員や下人が多数いたのである。

しかし、重要なことは、これら種々の社会的存在形態をとるものを、一様に検地帳に登録し、しかも一応一つの経営体を形成していたものには屋敷まで名請させているのであり、これにより名主百姓も小百姓も従属的な小百姓も同一の百姓身分として把握する出発点を作ったことである。A・BグループとD・Eグループの間には一定の支配関係があったと考えられるが、それを切断し、百姓身分として同一の存在であると把握したのである。ここに近世村落へのスタートが切られた。

3. 近世村落としての永田村の展開

(1) 戸数の変化

天正19年検地により30弱の経営体＝家が構成する村落として認定された永田郷は、その後どのように展開したのであろうか。中世末における永田郷内での支配関係の展開を断ち切り、皆一様に百姓身分として把握したことにより、それら百姓身分の家々の展開は新たな生産関係＝階級関係を形成するものではなく、同一階級、同一身分の者として体制に規定されつなされるのである。それは経営体＝家の増加に現象する。

表7 永田村における階層構成の変化

	天正19年 (1591)	承応年間 (1655頃)	延宝元年 (1673)		元禄11年 (1689)	宝永7年 (1710)
5町以上	1			50石以上	1	1
3～5				30～50		
2～3	1	1		20～30		
1.5～2	7	4	1	15～20	1	1
1.0～1.5	9	13	17	10～15	5	5
0.7～1.0	5	7	19	7～10	12	11
0.5～0.7		7	11	5～7	20	17
0.3～0.5	4	6	7	3～5	13	17
0.1～0.3	8	1	3	1～3	4	4
1反未満	9	1		1石未満	5	6
計	44*	40*	59*		61	62
史料	検地帳	割付帳	割付帳		宗門人別帳	惣百姓石高帳

*寺を含む

表7は年貢負担者の階層構成を年次を追って表示化したものである。年貢負担者は、天正年間には44人となっているが、これはすでに検討したように、経営体を示すものではなく、他の経営体に含まれている者がおり、実際の経営体＝家は寺を含めて30軒弱と考えられる。それに対して、承応年間の40人⁽³⁰⁾、延宝元年の60人は一応経営体の当主を示すものであり、経営体＝家の数としてよいであろう。すると、近世村落としての永田の展開は30軒から始まり、50年後に40軒、その20年後に59軒となり、以降60軒余にほぼ固定して、明治初年を迎えるのである⁽³¹⁾。これによれば、17世紀後半の家数の急増と、それが同世紀末以降は固定されて幕末に至ることは、永田における近世的秩序の形成過程が17世紀後半までであり、その外枠が幕藩制下で一応維持されて明治維新に至ったことを示すものであろう。

しかし、永田全体としての統計が示すこの動向は何を意味するかはその内部構成をみなければ分らない。まず最初の80年間の変化をみると、それは7反～1町歩を中心に前後の階層への集中が進み、大きな規模の田畑所持者が一人の例外を除いて姿を消していき、またそれに対応しているかのように、零細な耕地所持者もなくなっていく過程であるといえよう。この80年間に、それまでの開発で取り残されていた丘陵斜面および丘陵上の耕地化が急速に進み、寛文13年(1673)の新畑検地を受けて、耕地が増大した。また大きな耕地保有者の分割が進んだ。この二つの動きにより、7反～1町歩層の家を中心にして永田村は構成されるようになった。しかし、この延宝期にすでに水呑百姓が存在したことも注目される。延宝3年の「石高人別書上帳」には4軒の水呑が記載され、そのうち2軒は「商仕ゆ」とされ、他の2軒は「小作仕ゆ」となっているが、この4人はその前段階の年貢負担者が没落したものとしてはつながらない。別のコースを経て水呑化したものと考えられ、恐らく後に述べる下人が水呑として家を形成するに至ったのであろう。

延宝期のこの構成は17世紀末までは維持されていたが、18世紀に入ると次第に階層分化が進み、5反歩未満の零細層が増加して行く。このきざしはすでに宝永7年(1710)「惣百姓石高帳」に示されている。そして、水呑層の増加となり、農間余業の従事へと傾斜していく⁽³²⁾。それにもかかわらず、家数としては60軒前後に固定していたことは重要である。経済的に大きく変化しつつも、幕藩制の規定を強くうけて、外枠としての村落を構成する家は60という一定数を保っていたのである。このことは体制的規定制をうけて固定化された家相互化の社会関係も維持され続けたことを予想させるものである。

3. 近世村落としての永田村の展開

(2) 家の内部構成

延宝期に確定されて、近世中後期の階層分化の出発点を作った60軒余という家はそのような内容をもつものとして存在したのであろうか。それ以前の80年の経過の中で大規模な田畑所持者も零細な所持者も姿を消し、現代の農業経営の規模の平均値に近い、7反～1町歩前後の層で構成されているのである。そのような経営規模はいかなる労働力によって経営されていたのかをまず確定せねばならない。永田村にはこの期の宗門人別帳が何冊か残されているが、ここでは元禄11年（1698）の「五人組宗旨人別帳」を中心に、その前後の史料と関連させて検討しておく。元禄11年の宗門人別帳を使用するのは、これに各家の石高が記載されているからである。

元禄11年の宗門人別帳によれば、家数61軒で、他に寺が2軒ある。この61軒の家の家成員数を階層別に集計してみると表8のようになる。この家は、家の研究がすでに明らかにしているように⁽³³⁾、傍系親族や非親族の下人も含んだものであり、それを幕藩権力が貢租納入単位として把握したものである。この61軒は農業経営体としての実体をもっていたことは、系譜的にこれらの家は継承存続していき、明治以降に受け継がれていることにより明らかである。階層差により平均家成員数に違いがある。全戸の平均は6.4人であるが、3石未満は4.4人であり、3～10石層は5.9人、10石以上は12.3人となる。このことは経営規模が要求する労働力の違いをある程度意味しているであろう。しかし、より細かな階層区分に対応した平均人数の違いはどれほど意味があるかは疑問である。3石から10石の間を区分した3階層の間の平均人数はたしか

表8 元禄11年階層別家成員数表

階層	家成員数	2人	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16以上	20以上	計	1戸当り平均人数
50石以上																	1	1	31人
30～50																			
20～30																			
15～20												1						1	12.0
10～15						1	2	1							1			5	8.6
7～10			1		2	1	2	3	1	1								11	6.9
5～7	1	4	1	1	4	5	3				2							21	6.1
3～5		1	5	4	1	2												13	4.8
1～3			1	1			1	1										4	5.5
1石未満			2		1													3	3.7
0	1			1														2	3.5
計		2	9	7	9	7	12	8	1	1	2	1			1		1	61	6.4

表9 元禄11年家成員構成表

続 柄		10石以上	10～7石	7～5石	5～3石	3石未満	計	当主を100とした比率	
直系	{ 当主 主妻 子 子の嫁 孫 孫の嫁 父母 母 その他	7	11	21	13	9	61	100.0	
		7	10	20	10	9	56	91.8	
		17	29	52	27	15	140	229.5	
		3	2	4	1		10	16.4	
		4	3	3	1		11	18.0	
								0	
		3	1	2	1	7	11.5		
		4	3	3	6	16	26.2		
				1		1	1.6		
傍系	{ 伯叔父 兄 弟 妻 姉 甥 姪 妻 従兄弟姉妹 妻 その他				1		1	1.6	
									0
			4	4		2	10	16.4	
			2				2	3.3	
				4	1		5	8.2	
			1	1	1		3	4.9	
								0	
		1				2	3	4.9	
							0		
							0		
下人	{ 下男 下女	21	6	10		2	39	63.9	
		19	4	4		1	28	45.5	
計		86人	76人	128人	63人	40人	393人		

表10 元禄11年地位別夫婦関係別家数表

夫婦の地位	夫婦数	0	1	2	3	計
嫡系親族		5戸	41戸	13戸	0	59戸
嫡系+非嫡系の直系親族				0	0	0
嫡系+傍系				2	0	2
計		5	41	15	0	61

に上層ほど人数が多くなっているのであるが、この程度の差に有意な相関を認めることは無理なように思える。そこで、次にこの家成員の平均人数の差を作り出している家の内部構成の違いを検討しよう。

表9に示した家成員の構成によれば、永田村の家の内部構成は当主とその直系親族を中心にしたものであり、傍系親族はごくわずかである。その傍系親族も当主の兄弟姉妹が大部分で、それ以上に遠い傍系親族は例外的な存在といえる。しかも夫婦関係は、表10に示したように、嫡系にのみ存在し、非嫡系および傍系にはほとんどなく⁽³⁴⁾、わずかに兄弟に2組あるだけである。したがって、家の形態としては直系家

3. 近世村落としての永田村の展開

表11 平均子供数

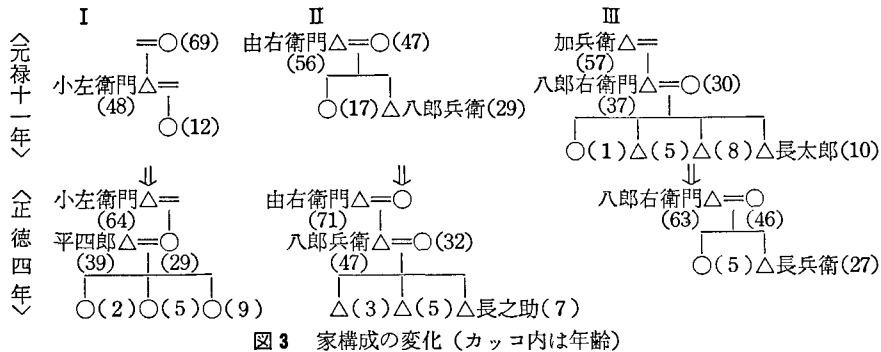
	人
10石以上	2.4
7 ～ 10	2.6
5 ～ 7	2.5
3 ～ 5	2.1
3石未満	1.7

表12 年季奉公人他出者

10石以上	0
7 ～ 10	2
5 ～ 7	2
3 ～ 5	3
3石未満	4
計	11人

族形態をとる単一の家が基本であり、非嫡系や傍系親族に夫婦関係を含む複合の家は例外的存在といえる⁽³⁵⁾。そして、この構成は階層によってそれほど違いがない。いずれの階層も嫡系親族の夫婦関係を中心にし、直系親族で構成されているのである。したがって、平均家成員数の階層による違いは傍系親族の人数によってひきおこされるのではなく、直系親族の家成員の人数の違いと非親族家成員の有無によるものと予想される。次にその点を検討しよう。

まず、直系親族の人数についてみれば、直系親族の中心は当主の子供であり、平均2.3人であるが、これの階層による差はそれほど明確でなく、ただ3石未満層が1.7人と意味ある差を示しているにすぎない(表11)。このように差がないのは当然である。経営規模によって生まれる子供の数に差があるはずはなく、もしも差があるとすればそれは生まれた後の変化として出てくることであり、3石未満層は多く年季奉公人に出していると考えられる。このことは4年後の元禄15年の宗門人別帳に年季奉公人になって家を離れている者の記載があるので判明する。表12のように、全部で11人が家を離れているのであるが、そのうち4人が元禄11年の3石未満層の家の者であり、3人が3～5石層である。3石未満の家は全部で9軒であるから、4人ということは家成員の平均値を0.4人下げていることになり、もしもこれが家にいれば3石未満層の平均も2.1人ほどになるのである。したがって、奉公人になって離れているのを加えれば、階層による子供数の差はほとんどないとしてよいであろう。むしろ、各階層とも、同一階層内で家の成員数に相当の幅があることが注目される。中心的階層である5～7石層では2人から11人までの幅があり、7～10石層では3～10人なのである。このことが逆に、単純な平均数字によって各階層と家の規模との相関を出すことがまちがっていることを示していよう。同一階層内でありながら、家成員数に相当な幅があり、しかもその幅は階層によってそう違わないのである。これを解釈するためには家族周期の考えを導入せねばならないであろう⁽³⁶⁾。すなわち、元禄11年という特定の時点で登録記録された家の内部構成は決して固定的なものではなく、変化しつつあるものを特定の時に固定化したにすぎないのである。家の成員数はいつも一定



数を保つのでなく、死亡、出生、婚姻、他出等により周期的に変化しているのであり、この宗門人別帳で8人の家も年月が経過すれば5人になり、3人になりうるし、また逆に3人の家も5人や7人になるのである。それは経営規模の変化とは関係なく起こりうる。ここに具体例を2、3掲げておこう(図3)。これによれば、決して多人数の家から少人数の家へ変化するのではなく、逆もまた一般的である。従来、年次の違う宗門人別帳の統計的処理によって、大家族の分解→小家族の成立あるいは複合家族の分解→単婚小家族の成立を説くのは安易な方法であったといえよう。

以上により、直系親族員数、特に子供の数の違いによって家成員数の差が出てきているということは、年季奉公人をやや多く出している3石未満の層と他の階層との違いについてはいえるが、それ以上の諸階層の間についてはいえないことが明らかである。むしろ、各階層を通じて家成員数に一定の幅があることに注目しなければならないし、それは家族周期の種々の段階が宗門人別帳に表現されているからであると理解すべきものであることが判明したのである。

そうであれば、家成員数の平均の階層による意味ある差は奉公人の有無あるいは人数によって生じたものと考えざるをえないであろう。元禄11年に登録された下人は67人であるが、その階層別に1戸当り下人数をみると表13のようになり、明らかに下人の数によって成員数の差が出てきているのである。特に10石以上の層とそれ以下との大きな差は下人の数によって引き起こされている。したがって、所持規模に対応した

表13 元禄11年一戸平均下人数

階 層		下 男	下 女	下 人 計	親族家成員	家成員平均
10	石 以 上	3.0	2.7	5.7	6.6	12.3
7	～ 10	0.6	0.4	0.9	6.0	6.9
5	～ 7	0.5	0.2	0.7	5.4	6.1
3	～ 5	0.0	0.0	0.0	4.8	4.8
3	石 未 満	0.2	0.1	0.3	4.1	4.4

3. 近世村落としての永田村の展開

表14 元禄15年下人構成表

階 層	譜代 下男	譜代 下女	計	年季 下男	年季 下女	計	一季 下男	一季 下女	計	合計	下人を かかえ る家数	全家数
10石以上	11人	11人	22人	11人	11人	22人	1人		1人	45人	5戸	7戸
7 ～ 10	1	4	5	5	1	6	2	3	5	16	6	11
5 ～ 7	4	3	7	2	1	3	1		1	11	6	21
3 ～ 5												13
3石未満				2		2				2	1	9
計	16	18	34	20	13	33	4	3	7	74	18	61

家の規模は親族によってもたらされているのではなく、非親族の家成員である下人の数によっているということになる⁽³⁷⁾。

ところで、この家の規模の差をもたらしている下人の内容はいかなるものであろうか。元禄11年の宗門人別帳にこの点についての記載はなく、すべて下男・下女とのみ書いている。ところが、4年後の元禄15年の「宗旨五人組御改帳」は下男・下女を譜代・年季・一季に分けて記載している。わずか4年後なので、その家の構成は元禄11年とほとんど変わらない。そこで、下人の性格をこの記載によって検討しても差しつかえはないと考えて、以下若干の試みをしよう。元禄15年に登録された下男・下女はすべてで74人であり、4年前より7人増加している。表14に示したように、74人の内訳は譜代34人、年季33人、一季7人となっていて、譜代下人の比率が高い。

譜代下人はどのような経過でそのような身分になったのかは明らかにしないが、主家と同じ寺の檀那になっていて、完全に主家の家成員になっている。一生主家に奉公すべきものとして存在したことは、12年後の正徳4年（1714）の宗門人別帳が高齢者で死亡したと考えられる者を除いては皆同じ状態で記載しているので分かる。このような譜代下人が18世紀に入ったころにもまだ相当数おり、しかも再生産されていたことは注目される。宗門人別帳には当然下人の夫婦関係の記載はないが、恐らく譜代の下男と下女の間に事実上の婚姻関係があり、その夫婦の間に生まれた子供がまた譜代下人として扱われたことにより、譜代下人層が再生産されていたのであろう。この夫婦関係は同一主家内に多くの男女の下人がいる場合はその家内で形成されていると考えられるであろうが、多くは1軒の家にいる譜代下人は少数であり、他家の下人との間に夫婦関係があったものとすべきであろう。前者のような形は名主家の服部彦六のみであり、他はすべて後者であるといえる。しかし、この下人夫婦の主家内での存在はかならずしも1軒の家として他の下人とは区別される名子・被官的存在を意味しないであろう。譜代下人は下人を親として出生することによって再生産されるだけで、17世紀後半以降新たに本百姓から譜代下人の身分に落ちるようなことで量的拡大

がなされることはなかったと考えられる。したがって、その人数には大きな変化はなく、正徳4年の宗門人別帳では、男16人、女16人の計32人となっている。その後の動向ははっきりしないが、近世を通じて存在し、永田の半数についてだけを見ても、18世紀後半以降7、8人の譜代下人がおり、明治3年には5人登録されている⁽³⁸⁾。たしかに全体として譜代下人は減少の傾向にあったといえるが、しかしそのことは譜代下人→自立した百姓というコースを歩んだことを意味しない。戸数はほぼ60戸前後に固定しており、それらは後に検討するように、系譜をたどってさかのぼれば近世初頭の30軒ほどにつながるものであり、譜代下人が上昇してその戸数の中に入るといってはなかったのである。基本的には、死亡によって消失することで譜代下人の人数は減少していったものと考えべきである。もちろん、中には土地と結合して年貢負担者となることなく、小作人とか農間余業を中心にして生活する水呑層に直接なっていったものもいる。そのことはすでに延宝3年の「石高人別書上帳」にその前の年貢負担者とつながらない4人の水呑がいることで推定できる。

年季奉公人（一季奉公人を含めて）がいつごろから永田において成立してきたのかは知りえないが、17世紀末には相当広く存在していたことはすでにみたごとくである。この年季奉公人は、戦後の近世史研究の成果として明らかにされている⁽³⁹⁾のと同様に、この永田村においても一つの身分ではなく、百姓→年季奉公人→百姓というサイクルの中における百姓の一時的にとる地位・状態であり、各家の経済的基盤の弱さを救うために一時的に放出されるものである。たとえば、持高が元禄11年現在5石7斗余という永田における標準的の百姓である利兵衛家では、12歳の惣領市三郎を隣接の保土ヶ谷宿岩間町へ年季奉公に出しているのであるが、12年後の正徳4年には、この市三郎は帰村し、吉兵衛と名前を変え、嫁もいるのである。また同じく7石3斗という佐次兵衛家でも元禄11年には惣領与兵衛（22歳）を一季奉公人として持高8石7斗の太郎兵衛の家へ出しているのであるが、これももちろん12年後には家にいて嫁をとっている。さらに、伊左衛門家では、すでに妻子のある惣領平左衛門（34歳）が名主の彦六の所へ年季奉公に出ているが、12年後には当主になっているし、5石8斗の市右衛門家では36歳の当主自らが、母親と子供を従弟の弥兵衛家に預けて、7石6斗の七郎右衛門家へ下人に行っているが、12年後には再び当主として妻子とともに1軒の家を形成しているのである。このような年季奉公人を多くかかえているのはもちろん10石以上層であり、これによりいわゆる手作地主の労働力を形成しているのであろうが、しかし10石未満の層においても年季奉公人が17人もいることは注目される。このことは、佐次兵衛家と太郎兵衛家、市右衛門家と七郎右衛門家の関係にもみられる

3. 近世村落としての永田村の展開

ように、各家の労働力の過不足をこのような一時的な労働力の放出と受け入れを相互にすることによって補完しているものといえよう。したがって、年季奉公人の存在は手作地主を規定しているだけでなく、今まで検討してきたように、直系親族を中心に、5～10石を経営する家の維持存続のためにも必要不可欠な労働力編成のあり方であったといえる。特にこの傾向は一季奉公人について明らかである。したがって、各家が農業経営に基礎をおきながら、安定できない段階において年季奉公人は多く、階層分化が進化し、労働力が農業外にも向かい、農業以外の収入で家が維持されるようになってくると、少なくなっていく。正徳4年には年季奉公人（一季奉公人も含めて）は34人で、12年前より6人減少しているのである。

以上により、17世紀後半に形成された60軒ほどの家は、経営規模からみれば7反～1町歩層を中心にしており、その家成員は嫡系に夫婦関係を含む、直系親族中心の構成をなしていて、経営規模の大きな家では譜代下人と年季奉公人という非親族の家成員が加えられているという形であることが明らかにできたであろう。

(3) 村落構成

このような内部構成をもつ60軒ほどの家が構成する永田村の村落構造の分析を1、2の史料を手がかりにして進めよう。まず延宝8年の次の史料である。

相定申手形之事

一今度村中さんざい馬草山相百姓勝手能御座いニ付相談ヲ以銘々ニ割取支配仕い
一先年道中助馬役被仰付い時分道中次助馬大小百姓ならしニ被仰付いニ付其通只今迄
御役勤来り申い故此以前間宮新左衛門様御代官所之時分さんざい谷地新田御訴訟申
上開発仕い時御役馬ならしニ相勤申いニ付右新田大小百姓壹人前ならしニ五せ歩つ
ゝ御割被下い故此度馬草山割之儀も大小百姓ならしに無高下割則くじを以めいめい
請取中ケ間出入無御座い
一此度割取申い馬草山ニ植木自然木成共一切定置申間敷い役馬大切ニ御座い間上木立
置いへ者馬草ふつていに罷成い間誰人之山成共中ケ間ニてきりすて馬草しけり申い
様ニ可仕い
一馬草山少分之儀ニ御座い間田畑むさときりこみ申間敷い
一名主役被成い方へ割之外ニ馬草山壹人前年寄役被成い衆へ馬草山三人前以上四人前
分此度惣百姓相談を以相渡シ申い支配可被成い
右さんざい山御代官様へ申上割取銘々ニ支配仕い間惣百姓相談ヲ以相定申い条々以来
少も相違間敷い為其連判如此ニ御座い以上

延宝八年申ノ四月
(1680)

九兵衛⑨
(以下63人)

この文書によれば、延宝8年には64名を惣百姓として村落が構成されていたこと、そしてそれらが中ケ間として互いに意識されていたことが分かる。以前の新田開発に際しても1人5畝歩ずつ分割したのであり、この「馬草山割之儀も大小百姓ならしに無高下割則くちを以めいめい請取」という形でその場所を決めている。

この規約で注目されるのは、特定の家格秩序がみられないことである。名主や年寄には一般の家より多く与えているのであるが、それは高い家格に対して、あるいは古い時代からの特権の存続としてではなく、「名主役被成ゆ方」や「年寄役被成衆」という表現が示すように、百姓の中でたまたまその地位についている者に対して与えるというものであり、それも「惣百姓相談を以相渡申ゆ」ということなのである。もちろん、経済的には家格的構成はもたないにしても、中世末の名主百姓の嫡系子孫としての家はある、それらの家がほぼ村役人を独占して、17世紀を過ごしてきた。名主は彦六郎の嫡系である三郎右衛門(彦六)が世襲し、年寄は帯刀の子孫である吉右衛門と市郎左衛門、四郎右衛門の子孫の左右衛門、源右衛門の子孫の源右衛門、二郎左衛門の子孫の茂左衛門であった。

すべて惣百姓が相談して均等に分割した理由は助郷人馬を各家均等に負担させられているからとしている。このことは当時の権力側の永田村に対する把握が百姓をすべて同等に扱っていたこと、そしてこの権力側の把握が村落内の各戸を互いに仲間として意識させ、その結果として均等に新田や馬草山を分割するにいたったことを示している。このような構成をとる基礎には、各家がほぼ同じような成員構成をとり、一定の経営規模をもっていたことがあるのは明らかである。

このように分割して各自の持山とした馬草山全体の維持管理について村の規約としてきびしい規制をしているのであるが、それに関連してさらに別の規約を作成して徹底させている。次の文書である。

相定申手形之事

一此度さんさい馬草山割取申ゆニ付村中田之くろ畑之まはり道川通地尻地かしら之馬草地主之外余人かたくかり申間敷くゆ並ニ余人之山へ入たきよく馬草等迄一切ぬすみ取申間敷くゆ若ぬすみ申者見出しゆハバ過銭として銭三百文づつ出シ可申ゆ若親類縁者中よき者ニ有之ゆとて見のかし申ゆハふたとへ後日ニ聞へゆとも見のかし申ゆ者の方を過銭三百文づつ急度出シ可申ゆ如此惣百姓相談を以相定申ゆ上ハ自今以後少も相背申間敷くゆ為其連判如此御座ゆ以上

4. 家の成立過程と分割相続

延宝八年申ノ四月

徳右衛門㊦

利兵衛 ㊦

甚太郎 ㊦

(以下欠)

各家の田畑の所持権を確認し、互いにそれを侵さないことを、馬草山の分割に際して、惣百姓で取り決めたものである。

このような永田村を構成する家々の対等性は享保年間における名主役の継承争いを生み出した。系譜的には同一である服部三郎右衛門家と服部吉右衛門家が村内を2分して自己の味方にして、その地位を争った。結果としては、享保14年にすべて同一の天領（御料）でありながら、2組の村役人が設置され、家々を2分割することになるのである。この形態は幕末まで続く。常識的に考えれば、同一系譜にある家は同族であり、それが争うとすればまず本家の地位をめぐるであろう。ところが、この2軒はそのような系譜関係を問題とせず、村全体の家々を分裂させて対立抗争するのである。その争いの中でも本分家や同族ということは一つも争点とはなっていない。

支配機構としての永田村には、村役人の下に五人組があった。享保14年以前は、全体で10組前後であったが、その編成は地域的な近隣関係に基づいていた。しかし、かならずしも固定的ではなく、家の増加や移動によって再編された。

4. 家の成立過程と分割相続

——南永田を中心として——

(1) 田畑の分割と家数の増加

17世紀後半における、直系親族を中心にした成員で5反～1町5反歩前後を経営し、比較的均質で、村落組織においても対等の関係を結んでいる60軒ほどの家々は、第1節でみた天正19年の30軒弱の家から次第に形成されてきたのであるが、家々の均質性とか村落組織の対等性ということも、この形成過程の中から理解できるであろう。

60軒ほどの家数に固定化した元禄年間の家々から順次その前にさかのぼり、その増加の内容を確認しよう。元禄9年（1696）と延宝元年（1673）の20年余の変化をみると、表15に示したように、名前にも共通性が多く、さらにそれが不明確でも上田以下の地目品等別の構成ごとの対応をみれば名前を連結させることができる。それによれば、元禄9年の62軒の家は若干の不明確なのを除いてすべて延宝元年に結びつく。そ

表15 永田村における家の継承関係

天正19年 (1591)		承応2年 (1653)		延宝元年 (1673)		元禄9年 (1696)	
広川金左衛門	反 1.7.7.21 (7.01)	喜左衛門	反 1.0.3.24 (3.16)	喜左衛門	反 1.4.3.02 (3.16)	兵三郎	反 7.4.24
						利兵衛	6.7.02
		善右衛門	1.0.4.01 (3.15)	善右衛門	1.5.0.23 (3.15)	勘兵衛	7.8.08
						伝兵衛	8.2.01
川井二郎左衛門	1.9.1.19 (5.04)	茂左衛門	1.5.6.03 (5.04)	二郎兵衛	9.9.07 (2.17)	佐次兵衛	9.8.00
				茂左衛門	1.0.6.20 (2.17)	茂左衛門	1.0.0.09
川井彦左衛門	1.3.22 (1.0.00)	長七郎	6.7.08 (5.00)	仁右衛門	1.0.2.09 (5.00)	四兵衛	1.0.0.07
		作左衛門	7.0.08 (5.00)	権左衛門	9.8.22 (5.00)	佐右衛門	8.8.06
中山右近	9.7.11 (1.1.00)	長右衛門	1.0.0.07 (1.1.00)	八郎右衛門	1.1.4.12 (1.1.00)	八郎右衛門	9.0.10
川井若狭	1.8.1.18 (1.2.15)	十右衛門	8.6.01 (6.07)	十右衛門	1.0.9.04 (6.07)	助右衛門	7.6.24
		二郎左衛門	1.3.8.26 (6.08)	二郎左衛門	9.2.19 (6.08)	八兵衛	7.1.10
吉岡新左衛門	1.1.9.26 (4.23)	彦右衛門 十藤	1.6.1.19 (4.23)	伝十郎	4.8.28 (.28)	才兵衛	4.9.21
				五郎左衛門	7.6.20 (1.13)	?	
				加左衛門	9.1.03 (2.12)	彦兵衛	1.1.4.13
服部彦三郎	1.3.0.17 (5.15)	庄右衛門	7.0.02	伝左衛門	9.4.06	太兵衛	1.3.1.27
		吉右衛門 与次右衛門	6.4.20	伊右衛門	5.9.20	伊右衛門	6.2.21
				八郎兵衛	5.3.25	由右衛門	5.8.23
鈴木源左衛門	2.3.8.23 (9.13)	源左衛門 小右衛門 忠右衛門	1.4.5.29 (1.4.28)	源左衛門	9.2.02 (7.14)	長三郎	5.9.10
						戸右衛門	3.2.11
				太兵衛	1.0.4.24 (7.14)	平三郎	1.0.2.15
服部帯刀	5.7.2.29 (6.26)	小左衛門 一郎左衛門	1.9.5.17 (6.26)	市郎左衛門	1.1.2.11 (3.13)	市郎左衛門	9.3.25
				吉右衛門	1.1.5.06 (3.13)	吉右衛門	1.5.2.28
		(帯刀) 二郎右衛門	6.2.25	勘左衛門	7.8.16	九兵衛	7.9.27
服部但馬	1.2.7.22 (4.08)	九郎右衛門	1.0.7.28 (4.08)	九郎右衛門	9.5.25 (4.08)	清三郎	9.1.21
服部雅楽助	8.3.29 (4.10)	徳右衛門 清右衛門	9.5.17 (2.05)	又右衛門	7.5.22 (2.05)	善左衛門	7.3.23
		作右衛門 喜右衛門	5.6.11	喜右衛門	8.4.07 (2.05)	忠右衛門	7.2.29
吉浜六郎左衛門	1.0.0.28 (5.03)	又左衛門	4.8.24	又左衛門	2.5.03	又左衛門	7.1.09
				六郎左衛門	3.2.23	勘右衛門	3.3.04
		孫左衛門	8.8.23 (5.03)	市郎兵衛	1.0.8.15 (5.03)	市郎兵衛	1.1.3.09
		(帯刀) 九右衛門	6.8.28	庄兵衛	8.9.04	庄兵衛	7.7.20

4. 家の成立過程と分割相続

清 宮 兵 庫	1.0.5.22 (1.1.25)	三郎左衛門 長左衛門	1.0.0.22 (1.1.25)	長左衛門	8.2.23 (5.27)	小右衛門	9.1.11
				六兵衛	7.9.06 (5.28)	六兵衛	7.8.23
服部七郎左衛門	1.8.3.17 (8.00)	庄左衛門 市右衛門	1.5.9.09 (8.00)	庄左衛門	9.6.07 (4.00)	三右衛門	8.4.09
				市左衛門	1.0.3.12 (4.00)	又兵衛	8.4.21
清 宮 彦 五 郎	1.5.11 (6.00)	惣左衛門	7.3.21 (6.00)	清 二 郎	4.4.24 (3.00)	惣左衛門	4.7.18
				作右衛門	4.5.26 (3.00)	惣兵衛	5.0.18
服部四郎右衛門	1.8.0.26 (9.15)	奎右衛門	1.4.9.24 (9.15)	伝兵衛	7.8.21 (4.22)	佐兵衛	8.9.11
				奎右衛門	1.1.1.13 (4.23)	奎右衛門	1.0.9.29
服 部 兵 二 郎	1.3.0.22 (1.18)	平右衛門	4.7.03 (1.00)	平右衛門	6.6.02	平右衛門	7.9.11
		平左衛門	4.2.19 (.18)	平左衛門	6.3.14	伊左衛門	6.5.29
服部清右衛門	9.1.17 (3.24)	新右衛門 久 二 郎	1.4.7.17 (3.20)	新右衛門	1.3.1.05 (1.27)	甚兵衛	1.2.1.20
				長右衛門	1.1.4.02 (1.27)	三郎兵衛	8.3.21
荒 井 奎 助	4.6.06 (6.24)	彦左衛門	7.2.14 (6.24)	彦左衛門	1.0.8.00 (6.24)	徳左衛門	1.0.5.12
		二 郎 吉	1.1.0.07	弥左衛門	1.1.2.12	弥左衛門	1.0.1.23
石 崎 善 五 郎	1.4.6.29 (1.2.07)	久 作 清左衛門	9.7.02 (6.04)	久 作	6.0.08	清左衛門	6.4.04
				吉兵衛	8.1.22 (6.04)	吉兵衛	8.5.06
		久 四 郎 与右衛門	6.1.19 (6.03)	久左衛門	5.2.24 (6.03)	作左衛門	8.2.08
		久左衛門	8.19	(与右衛門)		?	
金子善右衛門	1.0.9.23 (7.20)	藤右衛門	1.3.1.15 (7.20)	八郎左衛門 作兵衛	3.7.17 (3.25)	八郎左衛門	7.8.05
				藤右衛門	8.7.14 (3.25)	伊兵衛	7.5.16
岩 崎 主 計	1.5.9.07 (3.05)	七郎右衛門	1.1.7.29	七郎右衛門	1.0.6.05	七郎右衛門	1.0.7.06
		加右衛門	3.9.23 (3.05)	佐次右衛門	1.1.2.13 (3.05)	加右衛門	1.1.5.11
宮 森 与 太 郎	1.7.2.03 (1.6.20)	与次右衛門 弥右衛門	1.2.0.07 (1.6.20)	理右衛門	5.0.12 (4.05)	権兵衛	5.0.01
				忠兵衛 与次右衛門	5.3.13 (4.05)	忠兵衛	4.3.08
				安右衛門	3.2.25	?	
				徳左衛門	4.3.15 (8.16)	孫兵衛	5.2.20
紙透五郎右衛門	8.8.26	六右衛門 七右衛門 八右衛門	7.5.27	茂兵衛	5.3.01	小左衛門	5.4.02
				弥 蔵	1.5.02		
服 部 彦 六 郎	1.4.8.09 (6.10)	三郎右衛門	2.7.7.19 (6.10)	三郎右衛門	5.4.4.00 (6.10+28)	三郎右衛門	7.1.2.23
<寺>宝 地 庵	7.9.16 (8.17)	宝 地 庵	3.1.02	宝 林 寺	2.3.21 (1.18)	宝 林 寺	6.7.10
<寺>西 光 院	4.2.06 (6.00)	西 光 院	2.7.29 (6.00)	西 光 院	3.3.21 (6.00)	西 光 院	4.8.04

(注) ()内の数字は屋敷面積。天正19年は天正19年検地帳、承応2年は承応2年田方割付と明暦2年畑方割付之帳、延宝元年は延宝元年田方割付と延宝元年畑方割付勘定帳、元禄9年は元禄9年田畠高反別名寄帳より作成。苗字は現地調査および『横浜市史』1の第19表による。

表16 延宝元年から元禄9年へ変化した家と耕地

		延宝元年	元禄9年		延宝元年	元禄9年		延宝元年	元禄9年		
		喜左衛門	兵三郎	利兵衛	善右衛門	勘兵衛	伝兵衛	源左衛門	長三郎	戸右衛門	八左衛門
上 中 下 新 上 中 下 屋 新 下 新	田	3.1.26	1.5.01	1.6.25	3.5.05	1.9.18	1.7.17	2.4.25	2.4.25		
	田	5.12	2.21	2.21	5.12	2.21	2.21	1.5.08		1.5.08	
	田	2.9.11	1.4.21	1.4.20	2.8.01	1.4.01	1.4.00				
	下田	1.1.09	5.04	6.05	9.19	4.10	5.09			3.00	
	畑	2.18	7.00		1.8.23	1.0.26	3.15	1.1.09	5.16		3.30
	畑	1.2.12	3.24	1.3.12	4.24						
	畑	2.2.19	6.16	4.08	1.2.15	4.18	2.0.02	1.4.04	7.17	1.0.02	
	敷	3.16	3.16		3.15	3.15		7.14	9.13		
	下畑	2.3.26	9.16	3.10	3.5.29	1.2.28	1.5.18	1.9.20	7.15	2.24	
新畑		6.25	5.21		7.21	3.09		4.14	1.07	5.06	
計		1.0.3.24	7.4.24	6.7.02	1.0.4.01	7.8.08	8.2.01		5.9.10	3.2.11	8.09

れは多く1軒ずつ対応しているが、中には元禄9年の2軒で延宝元年の1軒に対応しているものもある。この延宝の1軒から元禄の2軒になっているのは、延宝の喜左衛門、善右衛門、源左衛門であるが、それぞれの田畑の変化を示すと表16のようになる。喜左衛門と善右衛門の場合のように、2軒に別れたとき、1軒が前段階の家の所持田畑を圧倒的に継承し、他の1軒はごくわずかを分与されたのみという形態ではなく、前段階の家の所持田畑を分割して、しかもそれはほぼ近い量で分割して成立してきていることが判明する。長三郎以下の3人は長三郎と戸右衛門が比較的多く、八左衛門がごくわずかししか登録されていないが、これは田畑の移動が起こり出したことを示すもので、元禄3年の田方割付帳によれば、長三郎の名前はなく、戸右衛門と八左衛門の二人が田をそれぞれ2反7畝歩、1反8畝歩登録しており、その合計はこの3人の田の合計よりも多いのである。

延宝年間から元禄年間への変化が田畑の分割による家の増加であったが、この動向はさらにその前の20年間でもまったく同じである。承応年間から延宝元年に至る20年間には、家数は19軒増加しているが、それはすべて田畑の分割によるものである。そして、この段階で注目すべきことは、それらの多くが屋敷も分割していることである。その分割の仕方もまったくの均等分割である。このようにして、17世紀後半の50年間の家の増加は家の田畑の分割による増加によるものであり、さらにその多くは屋敷を均等分割しているのである。

17世紀中期の承応年間の家は40軒であるが、この家はその前の天正19年検地段階にどのように関係するのであろうか。この間は60年ほど離れており、しかも名前のつけ

4. 家の成立過程と分割相続

方が大きく変化した時期であるから、名前を直線的に結びつけることはできない。しかし、幸いなことに、天正19年検地帳には名請人の記載の上に後筆で寛永～万治期にいたと考えられる名前が記入されており、この名前の変化を屋敷を基本にして田畑1筆ごとに検討すれば、天正19年検地から承応年間へつなげることができる⁽⁴⁰⁾。これによれば、承応期の名前がそのまま天正19年の屋敷名請人に対応している者は36人、無屋敷ではあるが名請地が多い五郎右衛門に対応している者が一人で、計37人である。これらのうち屋敷を継承しているのは30人で、合計30筆であり、その増加は天正検地の屋敷を均等分割してなされている。そしてこれはまた田畑においてもほぼ均等に分割していることが承応段階の田畑の所持規模から判明する。しかし、その分割が天正年間から承応年間までのいつなされたかは明らかでない。

承応年間の名前を天正19年検地の名前へ直接的につなげられないのが、承応年間の名前に3人いる。この3人のうち、二郎右衛門と九右衛門の二人は天正検地の無屋敷零細名請人ともまったく対応しない。承応段階のこの二人の田畑は天正19年検地ではほとんどすべて帯刀の名請地であるが、それは帯刀の名請地の中ではごくわずかな部分である。しかも帯刀の屋敷の分割は受けておらず、承応段階では無屋敷である。このことから判断すれば、この二郎右衛門と九右衛門は天正段階では帯刀家の家成員であるが、従属的な存在として経営体に含まれていたのであるが、その後帯刀の土地の一部を分与されて自立し、家として登場したものであろう。このような帯刀の名請地の一部を分与されたのはこの二人だけでなく、系譜が天正検地の屋敷名請人にたどれる37人の中にも何人かいるのであり、表17のごとくである。これらは帯刀と請作関係にあった者とか従属的關係にあったものと考えてよからう。この結果、帯刀の屋敷を継承した、恐らくは帯刀の嫡系子孫である小左衛門・一郎左衛門は天正段階の3分の1ほどに規模を縮小しているのである。

表17 帯刀の名請地の継承者
(直系の3人は除外)

	反
次 右 衛 門	9.0.18
彦 左 衛 門	1.2.12
九 右 衛 門	4.3.11
作 右 衛 門	3.6.16
久 左 衛 門	2.8.16

承応から天正へつながらない他の一人は二郎吉であるが、これは天正19年検地の帯刀の名請地のうちから9反歩余、但馬から5反5畝歩、筑後から3反歩、内匠から2畝歩を継承している⁽⁴¹⁾、このうち筑後と内匠のはそれぞれ全名請地である。この両者の武士風の名前から推測すると、帯刀と関係深い者で、帯刀と親族関係にあり、その家成員であったと考えられるが、後になって自己の名請地に加えてさらに帯刀の名請地および同じく服部氏である但馬の名請地を分与されて1軒の家として登場したのが二郎吉（次右衛門）であろう。

以上のように、元禄期の60軒余の家から遡源して、それらの家々の形成過程を検討した結果によれば、天正期の27軒余の家がその田畑・屋敷を分割する形で次第に家数を増加させてきた結果60軒ほどになったのであり、特に17世紀後半はまったくそのような田畑・屋敷の分割、それも均等分割、による家の成立の形をとっているのである。17世紀中期までに成立している何軒かの家は、天正19年検地段階には屋敷名請人の経営体に内包されていたのが土地を分与されて1軒の家になってきたことは明らかである。しかし、これはごく少数であり、しかも17世紀後半にはそのような家の形成はみられない。永田にあっては、家々の増加の基本的なコースとして下人・従属百姓の自立は存在しなかったといえよう。このことは譜代下人が18世紀初頭においても相当数いることにも関連しているであろう。

田畑・屋敷の分割による家数の増加の動向が家の標準経営規模を1町～1町5反歩層から7反～1町歩層に変化させたのであり、この17世紀の過程は決して階層分化ではなかったのである。

(2) 南永田における分割相続

以上のような経過の中に近世的な村落の成立してくる特質があると考えられる。そこでその点を南永田の家々に焦点を合わせて検討しよう。

南永田の地域に属すると判断される字は、天正19年検地では糸縄から九文字までであり、北永田に属する他の字とははっきり区別される。それは名請人がまったく別だからである。先に掲げた表5によれば、南永田には9人の屋敷名請人がおり、それぞれ田畑を特定のいくつかの字内に集中して名請しており、いずれも一括性を示しているが、特に源左衛門と金左衛門はその一括性が大きい。この源左衛門は田畑構成比ではAグループ、金左衛門はBグループである。この2軒に同じくBグループの若狭を加えた3軒の家を中心にして南永田は構成されており、源左衛門は南永田の東南部を中心に、金左衛門はもっとも奥の長者谷を中心に、若狭はその中間の房ヶ谷（寺ヶ谷）を中心にしていた。他の家々はこの3軒の名請地の周辺に田畑を名請しているが、その構成比からみれば畑が多く、前者3人に従属したような存在形態であったと考えられる。

以上のことは1筆ごとの名請状況をみればさらに明らかになる。南永田の田畑に検地帳の記載順に番号をつけ、その名請人を示したものが図4である。この中で耕地番号3番と4番はそれぞれ上田5反8畝24歩と5反5畝歩であり、さらに次の5番は中田1反5畝8歩で、ここだけで源左衛門は1町2反歩以上を一括して名請している。

耕地番号 1 3 5 7 9 11 13 15 17 19 21 23 25 27 29 31 33 35 37 39 41 43 45 47 49 51 53 55 57 59 61 63 65 67 69 71 73 75 77 79 81 83 85 87 89 91 93 95 97 99 101 103 105 107 109

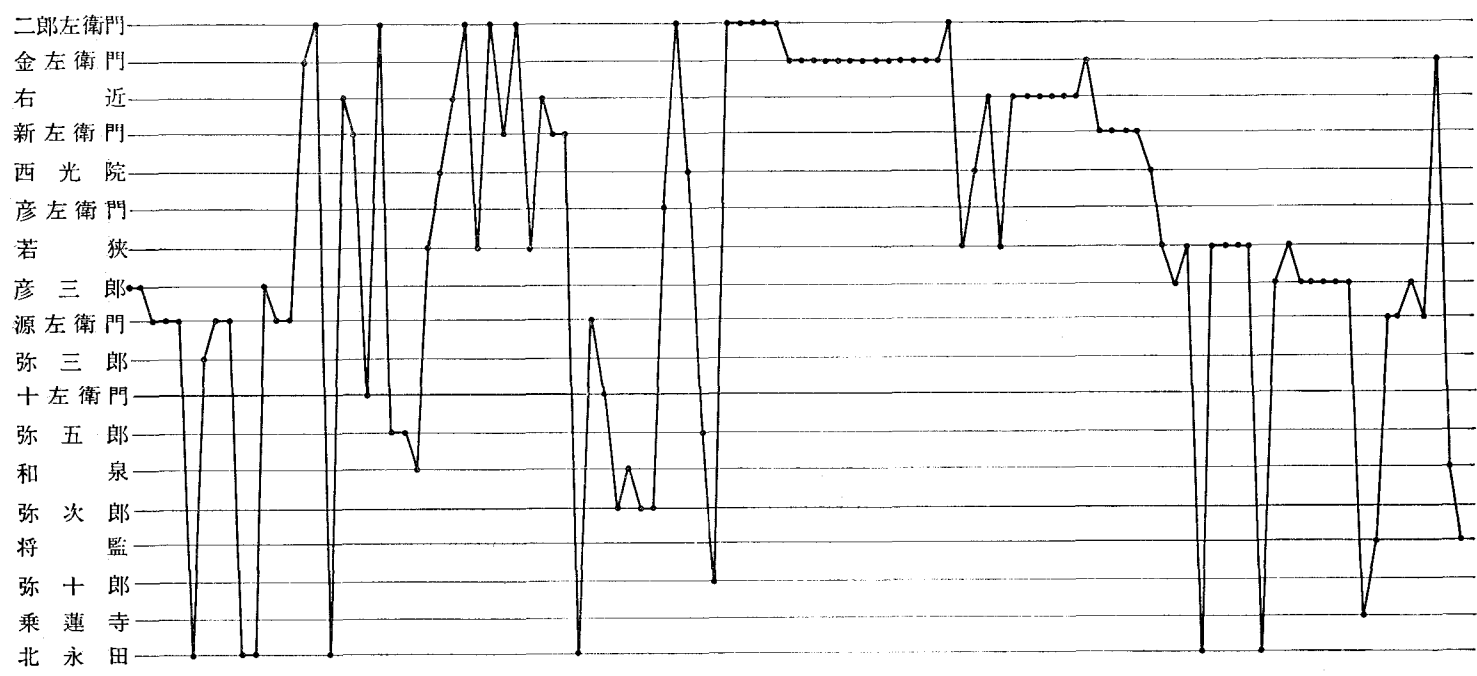


図4 天正19年検地における南永田の名請人の田畑配置

そして、この源左衛門の名請地の前後に彦三郎の田畑名請地があることは注目される。系譜を下ってくると源左衛門家は鈴木姓で、彦三郎家は服部姓を名のっているが、このような耕地の配置状況やその田畑構成が源左衛門はAグループなのに対し、彦三郎がEグループということから推して、彦三郎は源左衛門に対して従属的な位置にあった百姓であると判断される。このことは、天正検地で彦三郎が名請した屋敷5畝15歩が承応年間には源左衛門の継承者の屋敷になってしまっていることによっても推定できる。

この源左衛門と彦三郎と同様の関係を示しているのには若狭と二郎左衛門がある。名請地の全面積ではこの両者にはあまり大きな差はないが、その構成では若狭がBグループで、二郎左衛門はDグループなのである。その配置も交互に出てくる。若狭が古くからの家であるのに対し、二郎左衛門はより新しい家で、若狭家から耕地を分割されたものと考えられる。両家とも川井姓である。なお天正検地の彦左衛門はすでに表4で示したように、寛永～万治期に二郎左衛門家の田畑も3反歩余継承しており、二郎左衛門と関係の深い家である。恐らく、若狭・二郎左衛門・彦左衛門は系譜関係がつながる家であろう。また右近や新左衛門の名請地も若狭や二郎左衛門の名請地と混在し、散在して登場しており、それぞれ後には別の苗字を名のっているが、その田畑構成からいっても、若狭家などによって編成配置された従属的な家と考えられる。

金左衛門は完全に長者谷を占取して、独立した地域を形成しているかにみえる。

このようにして、天正19年検地に表現されている田畑の様相から南永田における中世末の構造を推定すると、3軒の中心的な家がそれぞれ占取している地域があり、その3軒に従属的に編成され配置されている5軒ほどの家があったということになる。しかし、すでに第2節で指摘したように、このような名主百姓と小百姓の従属関係の存在に重要性があるのではなく、逆に、中世末において従属性があったにもかかわらず、天正19年検地によってその関係を否定されて一様に年貢負担者としての百姓として把握されたということに注目せねばならない。南永田の住人間における支配被支配関係の展開の可能性は絶ち切れ、それぞれが一応自立すべき存在として扱われたのである。

この天正段階の8軒の家が承応年間には12軒、延宝年間には17軒、元禄年間には18軒になっているのであるが、この動向の内容は先に検討した永田全体のものと変わらない。田畑・屋敷の分割による家数の増加なのである。その具体的様相を個別的に検討していこう。

天正検地の金左衛門は南永田のもっとも奥の長者谷を独占的に占取しており、その耕地の長者谷への一括性は86%に及ぶ。屋敷は長者谷の北壁にあり、7畝歩を名請し

4. 家の成立過程と分割相続

ている。しばしば中世的な姿として示される⁽⁴²⁾，前面に自己の水田をもち，谷壁に屋敷をかまえ，背後に山をひかえるという形態である。姓は広川を名のっている。この広川金左衛門の家は承応年間には喜左衛門と善右衛門になっており，元禄年間には兵三郎，利兵衛，勘兵衛，伝兵衛の4軒になっている。承応年間の喜左衛門と善右衛門の所持田畑の品等別構成は次のごとくである

表18 承応年間の地目品等別所持面積

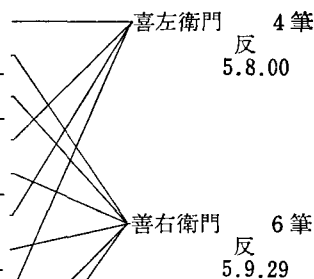
		喜左衛門	善右衛門
上 中 下 計	田	反 3.1.26	反 3.5.05
	田	5.12	5.12
	田	2.5.11	2.4.01
	計	6.2.19	6.4.18
上 中 下 屋 計	畑	2.18	1.8.23
	畑	1.2.12	4.20
	畑	2.2.19	1.2.15
	敷	3.16	3.15
	計	4.1.05	3.9.13
合 計		1.0.3.24	1.0.4.01

(表18)。地目品等によって異なるが，中田および屋敷においてはまったく等面積であり，その他は一方に多く分けられているが，それも田畑それぞれで合計すると，比較的近い規模になっている。さらに田畑合計では，1町3畝と1町4畝で，その差はわずかに7歩にすぎない。これは耕地の均等分割をした結果といってよいであろう。この分け方の実際の様相を知ることができるのは水田のみで，それは1筆ごとの分割した面積が記載してある寛文10年(1670)の

「小検見帳」と天正19年検地帳との比較によってである(表19)。

表19 喜左衛門と善右衛門の水田分割

字	品 等	天 正 19 年		寛 文 10 年	
		面 積	名 請 人	面 積	名 請 人
長者やと	上 田	反 1.9.15	金左衛門	反 1.6.25 2.20	喜左衛門 善右衛門
	上 田	1.7.15	〃	1.7.15	善右衛門
	上 田	3.0.01	〃	1.5.01 1.5.00	喜左衛門 善右衛門
	中 田	1.0.24	〃	5.12 5.12	喜左衛門 善右衛門
	下 田	2.0.22	〃	2.0.22	喜左衛門
	下 田	1.5.00	〃	1.5.00	善右衛門
	下 田	4.12	〃	4.12	善右衛門



天正19年検地帳および寛文10年小検見帳より作成

天正検地において金左衛門は長者谷の水田を7筆に分けて名請していたのであるが，それが寛文10年には10筆に分けられており，それぞれ喜左衛門と善右衛門が名請しているが，まず全体としては両者が交互に名請していることが注目される。また，

中田を均等分割しているだけでなく、上田においても最大の3反歩の1筆はそれぞれ1反5畝歩と等しく分けている。そして合計においてはほぼ等しくなるようにしている。天正段階では長者谷の水田を金左衛門が一括して名請していたのに対し、寛文期にはそれぞれ1筆を分筆し、交互に名請するという形で錯画させるに至っているのである。均等分割は単なる合計の等しいことだけではなく、耕地を交互にもって混在させて、生産条件を等しくするという内容も含んでいたといっよいであろう。

この喜左衛門と善右衛門は延宝以降元禄9年までの間に再分割して4軒になっている。その分割の様相は表16に示したごとくである。寛文期は新田の開発が進み、寛文4年(1664)に新下田畑、寛文13年(1673)に新畑が検地されて増加しており、分立した4軒の所持する合計耕地面積は3町歩余となり、3分の1の増加である。それを4軒で分けているのであるから平均7反歩余となる。喜左衛門の継承者である兵三郎と利兵衛は7反4畝歩と6反7畝歩であり、10:9という比率である。善右衛門の継承者である勘兵衛と伝兵衛は7反8畝歩と8反2畝歩であり、10:11となる。いずれ

表20 喜左衛門と善右衛門の水田分割(第2次分割)

字	品 等	寛 文 10 年		元 禄 9 年	
長 者 谷	上 田	反 1.6.25	喜 左 衛 門	反 1.6.25	利 兵 衛
	上 田	2.20	善 右 衛 門	1.10 1.10	伝 兵 衛 勘 兵 衛
	上 田	1.7.15	善 右 衛 門	8.22 8.23	伝 兵 衛 勘 兵 衛
	上 田	1.5.01	喜 左 衛 門	1.5.01	兵 三 郎
	上 田	1.5.00	善 右 衛 門	7.15 7.15	伝 兵 衛 勘 兵 衛
	中 田	5.12	喜 左 衛 門	2.21 2.21	利 兵 衛 兵 三 郎
	中 田	5.12	善 右 衛 門	2.21 2.21	勘 兵 衛 伝 兵 衛
	下 田	2.0.22	喜 左 衛 門	1.0.11 1.0.11	利 兵 衛 兵 三 郎
	下 田	1.5.00	善 右 衛 門	7.15 7.15	伝 兵 衛 勘 兵 衛
	下 田	4.12	善 右 衛 門	2.06 2.06	伝 兵 衛 勘 兵 衛

寛文10年小検見帳および元禄9年名寄帳より作成

4. 家の成立過程と分割相続

もほぼ均分といってよいであろう。そしてこの場合においても、表20に示されるように、1筆ごとの均等分割をしている。むしろ前段階より徹底しておこなっており、寛文期には10筆であったものが、元禄9年には18筆になり、そのうち16筆までが均等分割なのである⁽⁴³⁾。ますます同じような規模の水田を互いに錯圖させて長者谷の細長い谷に所持し、4軒は同一の生産条件を保持することになってきているのである。

このようにして4軒の広川姓の家は成立し、長者谷の北側の谷壁に屋敷を並べて一つのまとまりを作るようになる。そしてこの形態は近世を通じて変化はなく、近年までもちこされる。

この17世紀後半に成立した4軒の家は田畑所持規模においてはほぼ同じであるが、その家成員はどうであろうか。元禄11年の宗門人別帳で家成員の構成をみると図5のようになる。4軒とも直系親族によって基本が構成され、そのうち3軒は下人をかかえている。この下人は元禄15年の記載によれば、勘兵衛のは登録されていないので不明であるが、兵三郎と利兵衛のはいずれも譜代下人である。このような家の構成は享保3年(1718)にもみられる。

すでに推定したように、天正検地の若狭と二郎左衛門は密接な関係のある家であった。この2軒は主として房ヶ谷(寺ヶ谷)という字に田をもち、この谷戸と長者谷の境の少し入った所に屋敷をかまえている。この2軒から分立して登場してくる家々はいずれも川井を姓としている。

まず若狭から検討すると、若狭は屋敷を1反2畝15歩名請しているのであるが、これが承応年間には2筆に分けられ、6畝7歩と6畝8歩になっている。この屋敷の均

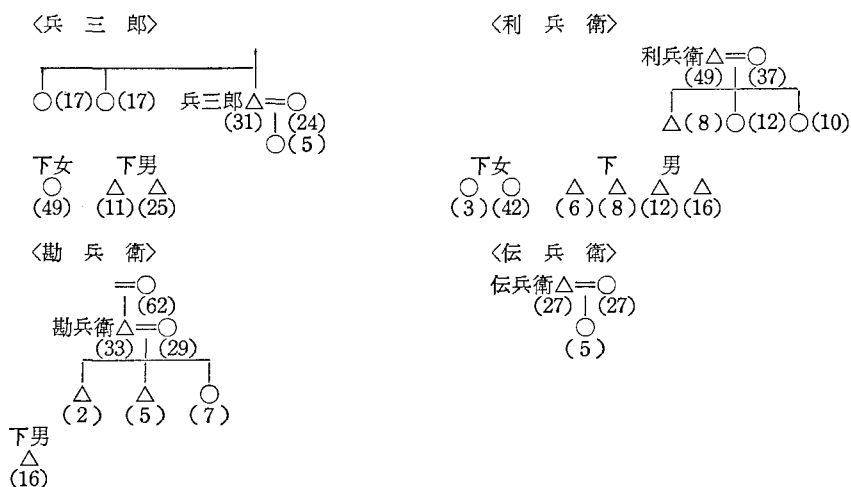


図5 均等分割をした家の家族構成(元禄11年, カッコ内は年齢)

表21 十右衛門と二郎左衛門の所持地の変化

	承 応 年 間			万 治 年 間			延 宝 元 年		
	十右衛門	二郎左衛門	計	十右衛門	二郎左衛門	計	十右衛門	二郎左衛門	計
上 田	反 3.1.18	反 5.7.14	反 8.9.02	反 3.1.18	反 3.4.04	反 6.5.22	反 3.1.05	反 1.1.07	反 4.2.12
中 田		1.1.01	1.1.01						
下 田	3.0.07	2.5.06	5.5.13	3.0.07	2.5.06	5.5.13	3.0.07	2.5.06	5.5.13
新下田	—	—	—	—	—	—	5.00	5.00	1.0.00
上 畑		5.00	5.00						
中 畑	2.20	1.3.01	1.5.21	4.24	4.24	9.18	4.24	4.24	9.18
下 畑	1.5.09	1.8.21	3.4.00	1.5.09	1.5.09	3.0.18	1.5.09	1.5.09	3.8.18
屋敷	6.07	6.08	1.2.15	6.07	6.08	1.2.15	6.07	6.08	1.2.15
新下畑	—	—	—	—	—	—	1.6.12	2.4.25	4.1.07
合 計	8.6.01	1.3.8.26	2.2.4.27	8.8.05	8.5.21	1.7.3.26	1.0.9.04	9.2.19	2.0.1.23

表22 十右衛門と二郎左衛門の水田分割

字	品 等	天 正 19 年		寛 文 10 年	
わたなわ	上 田	反 1.9.04	若 狭	反9.17 9.17	十 右 衛 門 二 郎 左 衛 門
房ヶ谷	下 田	4.4.07	〃	3.0.07 1.2.28	十 右 衛 門 二 郎 左 衛 門
	下 田	1.2.08	〃	1.2.00	二 郎 左 衛 門
いとなわ	上 田	2.5.00	〃	2.5.00	二 郎 左 衛 門
	上 田	2.1.18	〃	2.1.10	十 右 衛 門

十 右 衛 門 3 筆
 反 6.1.04
 二 郎 左 衛 門 4 筆
 反 5.9.15

天正19年検地帳および寛文10年小検見帳より作成

等分割による2軒の家の創出は、その基礎である田畑の分割においても、先の金左衛門と同様であったことを予想させる。ところが、表21のように、承応年間では均等に分割した様相はなく、十右衛門は8反6畝歩、二郎左衛門は1町4反歩弱で、その比率は10:16である。圧倒的に二郎左衛門の比重が高い。しかし、これより数年後の万治末年から寛文にかけての年貢割付帳を集計すると、ほとんどまったくといってよいほど地目品等別に均等分割している。その合計は十右衛門が8反8畝5歩、二郎左衛門が8反5畝21歩で、その差はわずかに2畝14歩である。ただこの間の変化をみると、不明な点として、上田、中田、上畑、中畑の面積が減少して、この二人のもでなくなっていることであるが、この過程は明らかにできない。しかし、残りの田畑については均等になるよう再編成されている。このことは、分割をした後も比較的流動的であり、恐らく分割時の家成員に基づいて分けられたものが家成員の構成変化に対

4. 家の成立過程と分割相続

応して再編成されて最終的には均等な規模にもっていったものであろう。金左衛門の例と同様に、水田について具体的配置を検討すると、表22のように、二人は各字でそれぞれ分割しあって田を所持するようにしているのである。

天正検地の二郎左衛門も延宝元年には茂左衛門と二郎兵衛の二人として登場している。この二人の場合も各地目品等ごとに均等に分割しており、その差は上田における4畝歩と新下田畑の2畝歩によって出てきているだけである。その割合は10:11である。その分割の様相も、表24のように、天正段階の各1筆をそれぞれ分割する形態をとっている。そして注目されることは、屋敷数であるが、2畝17歩ずつに分割しているが、元禄9年には佐次兵衛という二郎兵衛の次の代の者に4畝17歩が継承され、茂左衛門は

表23 延宝元年の二郎兵衛と茂左衛門の田畑所持面積

	二郎兵衛	茂左衛門
上 田	反 1.2.00	反 1.6.12
中 田	1.6.00	1.6.01
下 田	9.17	9.16
新 下 田	2.00	3.00
上 畑	1.7.09	1.7.09
中 畑		
下 畑	1.8.08	1.8.08
屋 敷	2.17	2.17
新 下 畑	2.1.16	2.3.17
計	9.9.07	1.0.6.20

表24 二郎兵衛と茂左衛門の水田分割

字	品 等	天 正 19 年	延 宝 元 年
わたなわ	上 田	反 2.4.00	二郎左衛門
			反 1.2.00 次郎兵衛 1.2.00 茂左衛門
房ヶ谷	中 田	3.2.20	"
			1.6.00 次郎兵衛 1.6.01 茂左衛門
	下 田	2.2.12	"
			9.17 次郎兵衛 9.16 茂左衛門
長者やと	上 田	4.12	"
			4.12 茂左衛門

天正19年検地帳および寛文10年小検見帳より作成

17歩になっている。これは下畑8歩と交換になっているのである。このことにより石高の上ではさらに近づいている。

このようにして、川井姓を名のる4軒の家が房ヶ谷（寺ヶ谷）と長者谷の間の丘陵の麓に屋敷をかまえるに至ったのである。その家の成員構成も直系親族を中心にしたもので、茂左衛門に下男が二人いるだけである。この二人は譜代下人である。

今までの事例でもすでに明かなように、天正検地段階にあった各家は田畑屋敷を各品等ごとにほぼ等しくなるように分割し、その具体的配置においても1筆を分け合う形で交互に所持して、生産条件を同じにしようとしながら分立してきた。南永田の残りの他の家についても基本的には同じであるので、その結果だけを表示化しておく

表25 南永田における田畑の分割（第1次分割）

天正検地 名請人 分割した人名	彦左衛門		彦三郎		源左衛門		新左衛門		
	長七郎	作左衛門	吉右衛門	庄右衛門	太兵衛	源左衛門	伝十郎	五郎左衛門	加左衛門
上田	反 2.7.10	反 3.4.26	反 3.5.26	反 3.5.25	反 3.9.18	反 2.4.25	反 1.5.01	反 2.2.16	反 1.7.17
中田						1.5.08	7.24	1.1.21	1.9.14
下田									
新下田					5.00		2.00	3.00	5.00
上畑					1.1.09	1.1.09	6.09	9.13	1.5.21
中畑									
下畑	3.4.28	3.0.12	2.8.24	3.4.07	1.4.03	1.4.04	3.23	5.20	9.13
屋敷	5.00	5.00			7.14	7.14	.28	1.13	2.12
新下畑					2.7.10	1.9.20	1.3.04	2.2.27	2.1.16
新畑									
計	6.7.08	7.0.08	6.4.20	7.0.02	1.0.4.24	9.2.02	4.8.29	7.6.20	9.1.03
	10 : 10		10 : 11		10 : 9		10 : 16 : 19		

（表25）。これによれば、天正検地の彦左衛門を継承した長七郎と作左衛門（承応2年に分立を確認）、彦三郎を継承した吉右衛門と庄右衛門（承応2年）、源左衛門を継承した太兵衛と源左衛門（延宝元年）はいずれもほぼ等しい面積を所持しており、均等分割の結果と考えてよいであろう。このうち、もっともその差が大きい太兵衛と源左衛門の1反歩余の差は新下田畑により出てきているのであり、それを除いた本田畑のみで合計を出すと、太兵衛7反2畝14歩、源左衛門7反2畝12歩となり、ほとんど完全に均等分割しているのである。新田の開発前にすでに分立していたのであろう。

ところが天正期の新左衛門から伝十郎、五郎左衛門、加左衛門の3軒に分立しているのは、それらに比較すると不均等であり、伝十郎と加左衛門の間では2倍以上の差があるかのようにみえる。しかし品等別に検討してみると、これは新左衛門の名請地が2次的に分割された結果であることが判明する。伝十郎と五郎左衛門を合算したものと加左衛門の合計とはやはり相当な差があり、伝十郎+五郎左衛門は1町2反6畝歩、加左衛門は9反1畝歩であるから、10 : 7であるが、品等別にみると、伝十郎+五郎左衛門=加左衛門となるのが中田、新下田、上畑、下畑、屋敷と5品等にわたり、このことから判断すれば、新左衛門の家は第1次分割では2軒にほぼ等しく分けられ、8反4畝歩と6反4畝歩の家として成立したが、その後の新田開発の成果を加えて1軒の家では第2次分割した。その結果が延宝元年のこの割付帳に登場していると考えてよいであろう。この第1次分割があったことを示しているのが天正検地の新左衛門に対応する名前が承応2年の田方割付帳に彦右衛門・藤十という連名で出てき

4. 家の成立過程と分割相続

て年貢を負担していることである。この連名はすでに家として分立しているのが、それまでの年貢負担の形式に対応させようとしたものといえる。

天正検地の段階で南永田に存在したと考えられる8軒の家は、承応年間や延宝年間に分立した家として登場してきた。それは均等分割によるものであり、互いに規模の点でもほぼ同じであり、その生産条件も同一にするような形で新たな家を形成した。そして、引き続き、喜左衛門や善右衛門、伝十郎・五郎左衛門のように、第2次分割をする家も出てきた。第2次分割は、以上の2例の他に、吉右衛門、源左衛門が

それぞれしている。この結果として、南永田は20軒の家で構成されるようになる。この第2次分割の様相を表示化すれば表26および表16のようになる。伊右衛門と八郎兵衛は10：9で均等分割を示している。これに対し、源左衛門から分立した長三郎以下の3人は大きな差がみられる。しかし、これは元禄9年名寄帳で確認された数字であり、すでに述べたように、分割後から元禄9年までに移動があった可能性がある。

以上、天正19年検地から元禄年間に至る100年ほどの間の家の増加は田畑・屋敷の分割によってなされた。それは多くが均等分割といってよいものであった。この分立は承応年間から延宝年間に集中して確認されるが、この承応年間に確認された分立がいつなされたかは直接的には示されていない。恐らく、承応年間にそれほど速くはさかのぼらないであろう。それは天正19年検地帳に後筆で記入されている人名が寛永～万治期、すなわち承応年間前後、のものと考えられるが、それが天正検地の1筆に対して多く連名で記載されているからである。検地帳に名前を記入したのは分立の結果を確認するためであり、それが寛永～万治期の名前であることは、この期に盛んに分割がなされたことを示すものであろう。

これまでの検討の結果をまとめる意味で、南永田の全事例の分割比を示すと表27のようになる。第1次分割は7例、第2次分割は5例であるが、前者にあってはほぼ10：10という均等分割が4例、10：11が2例で、圧倒的に田畑を均等に分け合うことで家が成立しているのである。それに対し、後者では10：10ないし10：9という均等分割を示すのは3例なのに対し、10：5：1とか10：16という差の大きなものがある。

表26 田畑の第2次分割

承応2年		吉右衛門	
延宝元年		伊右衛門	八郎兵衛
上	田	反 2.0.03	反 1.6.23
中	田		
下	田		
新	下	5.00	5.00
上	畑		
中	畑		
下	畑	1.4.12	1.4.12
屋	敷		
新	下	2.0.05	1.7.20
新	畑		
計		5.9.23	5.3.25
		10：9	

表27 南永田における分割比

第1次分割		
喜左衛門：善右衛門	反 1.0.3.24 : 反 1.0.4.01	10 : 10
十右衛門：二郎左衛門	8.8.05 : 8.5.21	10 : 10
二郎兵衛：茂左衛門	9.9.07 : 1.0.6.20	10 : 11
長七郎：作左衛門	6.7.08 : 7.0.08	10 : 10
吉右衛門：庄右衛門	6.4.20 : 7.0.02	10 : 11
太兵衛：源左衛門	7.2.14 : 7.2.12	10 : 10
(伝五郎左衛門)：加左衛門	8.4.18 : 6.4.17	10 : 8
第2次分割		
兵三郎：利兵衛	7.4.24 : 6.7.02	10 : 9
勘兵衛：伝兵衛	7.8.08 : 8.2.01	10 : 10
伊右衛門：八郎兵衛	5.9.20 : 5.3.25	10 : 9
伝十郎：五郎左衛門	4.8.29 : 7.6.20	10 : 16
長三郎：戸右衛門：八右衛門	5.9.10 : 3.2.10 : 8.09	10 : 5 : 1

やはり17世紀末以降の村落を取り囲む諸条件の変化を示していよう。

均等分割を基本として登場した家々は、いくつかの例で示したように、直系親族を家の成員としており、少人数で構成されていた。傍系親族はほとんどいない。ただ何軒かの家には下人がいたが、この下人は多く譜代下人であった。

5. 村落構成と互助組織

(1) 課題と方法

前節で17世紀を通じて家々が田畑を均等分割して生産条件を同一にする形で互いに分立してきたことをみてきた。このような家の成立過程が近世村落としての永田を特質づけたことはいうまでもない。しかし、均等分割ということは各家の個別的現象であり、そのまま直接的に村落そのもののあり方を規定するわけではない。その媒介として設定されなければならないのが、それら均等分割をして成立してきた家々の相互の直接的な社会関係である。その日常的な営みのあり方を基礎にして村落の構造的性質も作られていると考えられるのである。南永田の各家を中心にしてこのことを考えよう。

元禄期までに20軒ほどの家として成立した南永田において、これら分立した家々の間にいかなる社会関係が形成されたかを明示してくれる史料はまったくない。永田村全体でも同様である。これは、文書史料のもつ限界である。ここに民俗資料の採用と

5. 村落構成と互助組織

分析による文書史料との統合をはかる必要が出てくるのである。しかし、かつての永田村は現在横浜市南区永田町となり、完全に住宅地化しており、以前の農村的景観はほとんどみることができない。そのような現状から歴史的世界を分析し再構成することが可能な調査をすることは非常に困難である。多くの点で制約される。

(2) 南永田の村落構成

永田は近世以降南永田と北永田に地域的に分離していた。それは天正19年検地の耕地名請状況からも明らかであるが、これが社会的にも別であったことは、西光院の過去帳が近世初頭から南・北の肩書をつけている⁽⁴⁴⁾ことによっても推定される。

永田は一つの村落としての形式をしている。それは氏神の祭礼である。北永田に祀られている春日神社が全体の氏神で、9月11日に祭礼がある。『風土記稿』には「例祭9月1日、村内西光院開扉し、相州鎌倉八幡の社人坂井淡路社家等を連来て祭儀を行ふ、又7月7日村民こぞりて網代の的を射て奉納とす。弓には竹又は牛ころしと呼べる木を用ゆと云」⁽⁴⁵⁾と記されているが、後者の7月7日の行事は現在おこなわれていない。神社を管理するのは総代であるが、北永田二人、南永田一人の3人によって構成されている。また、当番というのがあり、北永田10人、南永田5人それぞれ家順に出て、月の1日15日の2回神社のそうじをしに行った。このような永田全体での祭礼を近年はやめ、南永田は南永田にある白幡神社で祭礼をするに至っている。

南永田にある白幡神社はしかし決して新しいものではない。古くからの存在であり、『風土記稿』には「白幡明神社 除地6畝、字坊入にあり、爰も小高き山なり⁽⁴⁶⁾」とある。その祭礼も現在の祭礼とは別に古くからあった⁽⁴⁷⁾。南永田の神社として明治42年まであったのが、春日神社に合祀された。しかし、祭礼はなくならず続けられていた。祭礼は11月17日であったが、昔はこの神社に4畝歩の畑があり、50銭の小作料で貸していた。この50銭で菓子を買ひ、それを子供たちに配ったのが主要な行事であった。そして、南永田の若衆たちはこの祭礼のヨミヤから神社に泊り込んだ。今では祭礼の日におヒマチをするだけである。

今では家が建て込み、危険なため実施されていないが、正月15日のサイトヤキには南永田の全戸から正月の飾りを白幡神社の前にもちよって燃していた。この白幡神社の下が南永田の中心であり、階段の横に石像があるが、これを道祖神といっている。

白幡神社の祭祀やサイトヤキに示される南永田としてのまとまりを他の面にわたっては今となっては明らかにできない。多くの住宅が建てこみ、自治会は完全にそれら新居住者中心に運営されており、役員も新居住者が占めている。かつての村落組織と

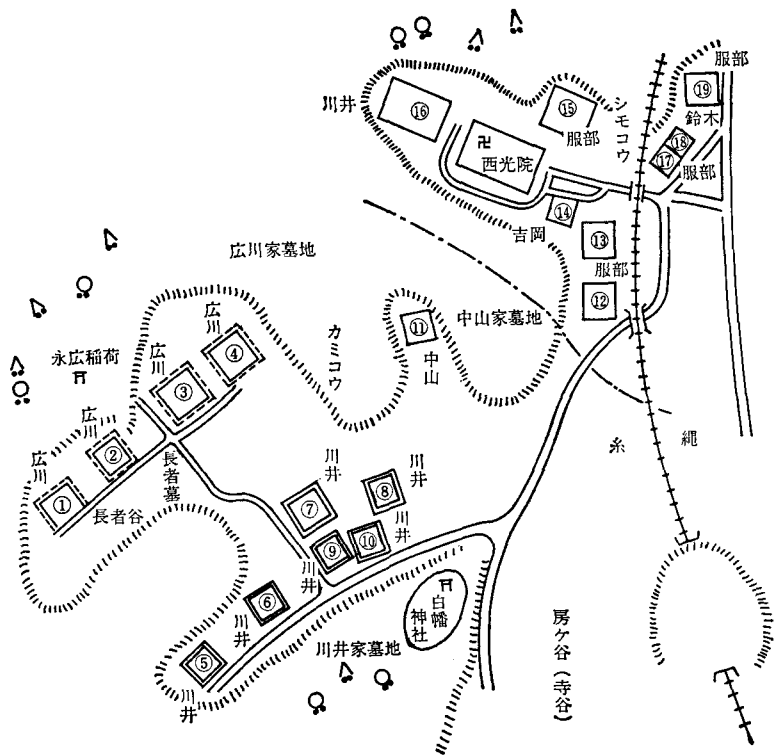


図6 南永田の概観図

しての様相はない。

集落としての南永田は、かつての姿を復原すれば、小村の集合である。丘陵の麓に2・3軒の農家がかたまって散在していた。図6は最近の住宅を除いて、古くからの居住者およびそれと系譜関係のある家のみを図示化したものである。これによれば、小集落は大きく三つになる。一番奥の長者谷の4軒で、これは広川姓の家々、次いで白幡神社に近い小さな谷戸のふところにいだかれた6軒ほどの家で、これは川井姓、そしてずっと下の平野に直接面した小さな谷に西光寺があり、その周辺に8軒ほどの家があるが、ここは服部、鈴木、川井、吉岡などの姓が混在している。

白幡神社の存在が示しているように、南永田は一つの社会＝村落であるが、その内部は二つに分けられていた。これは現在でも古い家々の間では生きているが、西の方の広川、川井姓の家を1グループとして、これをカミコウ（上講）と呼び、それに対して西光院周辺の家々をシモコウ（下講）と呼んでいるのである。この区分は講組としてあり、念仏講、地神講などが上講・下講別々の組織でおこなわれてきた。

念仏講は毎月15日に月当番と呼ぶ順送りのヤドに集まって、夕食後茶菓で話し合うものである。今では旧農家でも完全にサラリーマン化した家は出席しなくなってきた

5. 村落構成と互助組織

ので、参加が少なくなり、別々では無理ということになって、上・下合同して南永田の旧農家全体の会合となり、無尽をしたり、農協関係の連絡をしたりしており、新居住者に対して旧農家の独自の組織として残っている唯一のものである。

地神講は普通ここではオヒマチと呼ばれており、春と秋の社日にやはり順送りにヤドを担当しておこなわれてきたが、今では中止されている。また2月初午には稲荷講もおこなわれていた。

この他に庚申講があった。これも2組に区分されていたが、かならずしも上講・下講という別ではなく、各組の家が混在していた。家番号①と⑥は下講に中心がある組に、他の残りの上講の家には下講の2軒が入って一組を構成していた。この区分の由来は説明されていない。庚申講はもちろん庚申の日に集まるのであるが、庚申様のお宮というのを順送りのヤドでまわして、それをまつる形でおこなわれてきた。ところが、ヤドでそのお宮を預かると病気が出るということで、ついにそれを西光院へ預けてしまい、そのまま庚申講は消えた。

今では農業生産はごくわずかの畑と温室のみであり、農業を基礎においた社会関係はほとんど必要がない。したがって、その点で共同作業、共同慣行は何もない。また行政的連絡は自治会から班へとなされており、それはすべて新居住者を含んだもので、旧来の南永田→上講・下講の機構はまったく機能を果たしていない。今ではこれらの点を明らかにできない。

(3) 生活互助組織

冠婚葬祭における互助の様相を現在なおはっきり示している南永田の奥半分の上講の例でみておこう。これらの家々の互助組織が明確になるのはまず葬式のときである。

上講の中のある1軒で死者が出ると、その家ではまず自分の居住するヤトの家々に知らせる。ヤト（谷戸）の家々が集まると共に、上講全体にそのことを知らせる。そして、上講全体が集まると、そこで、関係者に死亡の通知をするツカイ（使い）に立つ者が二人ずつで必要に応じて何組か決められ、また葬儀に際して墓穴を掘り、棺をかつぐ役のアナホリ（穴掘り）は4人家順によって担当するのであるが、その担当者を確認する。お通夜になると、各家から出て念仏をする。この葬儀の執行にさいはいを振り、式をとりしきるのはその谷戸の家々である。古い家の場合は谷戸の家々が集まって相談してすべて決めている。長者谷戸の広川姓では①，②，③の3軒，前の谷戸の川井姓では⑤，⑥，⑦，⑧の4軒である。それに対して④，⑨，⑩の家はそれぞ

表28 南永田上講の家々

家 番 号	姓	屋 号	系 譜 伝 承	組 内
1	広 川	ワ キ		○
2	"	ヤ ト		○
3	"	—		○
4	"	—	②の分家（初代）	（新）
（4）つぶれ	"	—	①②③の本家	○
5	川 井	イ リ		△
6	"	ヨヘイ		△
7	"	カ ド	⑥の分家	△
8	"	アタラシヤ	⑤の分家	△
9	"	—	⑦の分家（初代）	（新）
10	"	—	⑧の分家（初代）	（新）
（11）つぶれ	中 山	—		？

れ近年の分家で、直接の本家が運営執行をしている。

婚礼についてみよう。婚礼の場合は上講全体が関係することは普通はない。手伝いに来てくれるのはその家のある谷戸の4・5軒である。それで手不足のときは他のもう一つの谷戸をたのむ。式にあたってその運営をする者としてショウバン（相伴）が二人出るのであるが、この役は古い家の場合はその谷戸の家が相談して決める。その谷戸の中の年配者、経験者になるので、特定の家に固定していない。この相伴のことを、長者谷戸の広川姓の家々では、ジミョウと呼び、一人で残りの他の2軒の家の年長者になるのが普通である。

以上のように、南永田における生活互助組織は講一谷戸という構成になっているが、古くからの家と新しい分家とではその谷戸の機能が異なっている。谷戸は奥まった所の長者谷戸とそれより下の所にある前の谷戸の二つである。前者は広川姓の家4軒、後者は川井姓の家5軒で構成されているが、実際に互助組織になっているのは新しい分家を除いた古くからの家で、長者谷戸は3軒、前の谷戸は4軒である。それに対して近年の新しい分家はその本家が世話をし、中心になって活動する。この谷戸の古くからの家の仲間をまたしばしばクミウチ（組内）と呼んでいることは注目される。谷戸＝同姓の家なのであるが、その互助をしているのは本分家関係にあるからではなく、組内だからなのである。

上講を構成する家々を表示化すれば表28のようになる。これによりその相互の関係をみておこう。広川姓の4軒も川井姓の5軒もそれぞれある程度その系譜関係を伝えている。広川姓4軒のうち、④は②からの戦後の新しい分家で、残りの3軒が古くからの家であり、組内として相談協議する仲間である。本来広川姓の家は4軒で、新し

5. 村落構成と互助組織

い分家がある所に戦前まで1軒古くからの家があった。この古くからの4軒の相互の本分家関係ははっきりしないが、今はない家が全部の本家だったという。そして、この4軒は永広稲荷という小祠を2月初午に回り番でヤドを担当してまわっていた。この回り番のヤドのやり方も古くからのものであったという。そして冠婚葬祭について相談協議する仲間だった。この①、②、③と今はない家4軒は近世のどの家になるのかは墓地の銘文や伝承からはっきりしている。①は元禄年間の伝兵衛、②は利兵衛、③は勘兵衛となり、そして今はない家は兵三郎である。

川井姓の6軒のうち、⑨、⑩の2軒は戦後の分家で、⑨は⑦から、⑩は⑧から出たものである。したがって、古くからの家は⑤、⑥、⑦、⑧の4軒である。この4軒はいずれも近世からの存在であるが、その系譜関係はかならずしもはっきりしない。⑧は4代ほど前に⑤から分家したといい、⑦は14・5代ほど前に⑥から分家したらしいという。しかし、⑤と⑥の関係についてははっきりしない。⑥がもっとも古く、⑤と⑦がその分家という伝承もあるし、逆に⑤が本家で⑥はその分家という人もいる。総じて系譜関係は不明確であり、しかもその系譜伝承があったとしてもそれは相互認知されていないことが多い。現在判明するところでは、⑥と⑦の田畑は互いに接しており、ほぼ同じ面積ずつで並んでいたという。その点から判断すると、⑥と⑦は系譜関係がはっきりしている。しかし、すべての系譜伝承は社会関係を規定するものとはなっていない。社会組織としては⑤、⑥、⑦、⑧の4軒が仲間として互いに等量負担しておこなわれているのである。したがって、本家を中心にした系譜関係に基づく団体ではないのである。なお、系譜関係のはっきりしない⑤と⑥はすでに近世前期に成立していた家と考えられるが、⑤は代々茂左衛門と呼ばれたといい、そうだとすれば天正検地の二郎左衛門家である。⑥は屋号にもなっているように与兵衛と名のついていたというが、近世のどの家にあたるかは明らかでない。可能性があるのは、天正検地に出てくる若狭か延宝元年段階に茂左衛門と分立した二郎兵衛（佐次兵衛）である。

このそれぞれの谷戸＝同姓の家々をクミウチ（組内）と呼ぶのは、系譜関係があるからではなく、組という組織として存在したからであろう。そこで近世の五人組との関係を考えてみる必要があるだろう。ところが、川井姓の家々は以上のように系譜関係を完全に確定できないので、近世の五人組と組内の関係をはっきりさせることはむずかしい。その点で限界があるが、表29のようになる。広川姓の4軒はつねに同じ五人組に属し、それに川井姓の1軒が加わる形である。いずれも現在の上講の地域にある家々であるが、元禄15年には下講の地域の太兵衛が属している。川井姓の家々は4軒に中山姓の家を1軒加えて五人組となっているが、この川井姓の家は2軒が茂左衛門の

表29 南永田の五人組の構成変化

姓	元禄11年		元禄15年		正徳4年		享保3年		講
広川	兵三郎		兵三郎		庄之助				
〃	勘兵衛		勘兵衛		勘兵衛		勘兵衛		上
〃	利兵衛		利兵衛		利兵衛		利兵衛		上
〃	伝兵衛		伝兵衛		伝兵衛		伝兵衛		上
川井	佐次兵衛		太兵衛		佐次兵衛		佐次兵衛		上
〃	茂左衛門		茂左衛門		茂左衛門		茂左衛門		上
〃	勘四郎		勘四郎		勘四郎		勘四郎		上
〃	今兵衛		四兵衛		四兵衛		四兵衛		下
〃	佐右衛門		佐右衛門		佐右衛門		作右衛門		下
中山	八郎右衛門		佐次兵衛		八郎右衛門		長兵衛		上
川井	介右衛門		八郎右衛門		助右衛門		介右衛門		上
〔北永田〕	伊兵衛		伊右衛門		伊右衛門		伊右衛門		下
吉岡	彦兵衛		彦兵衛		彦兵衛		彦兵衛		下
〃	才兵衛		才兵衛		才兵衛		才兵衛		下
服部	太兵衛		由右衛門		多兵衛		太兵衛		下
〃	伊右衛門		戸右衛門		戸右衛門		戸右衛門		下
〃	由右衛門		長三郎		由右衛門				
鈴木	伝七		佐五右衛門		佐五右衛門		佐五右衛門		
〃	長三郎		平三郎		伝右衛門		伝右衛門		下
	佐五右衛門		市郎左衛門		六郎兵衛		六郎兵衛		下
	平三郎								
	市郎左衛門		北永田		北永田				

子孫で上講の家、他の2軒は彦左衛門の子孫で下講の家である。そして若狭の子孫の家は他の五人組に一貫して属している。したがって、かならずしも系譜関係にある家が同一の組内とはいえない。この30年間だけでも変化があるので、これ以降も何回となくその組み合わせは変更されたと思われる。その中でどのように五人組が機能をはたしてきたかもよく分からない。しかし4冊の宗門人別帳に表現されているように、近隣の家を同一の組にし、その端数を他の地域から組み入れて五人組にするという基準は一貫していたであろう。それが結果的に広川姓を中心にした五人組、川井姓を中心にした五人組という形で存続した。その系譜関係にある同姓の家々には本家・分家と

5. 村落構成と互助組織

いう庇護奉仕の関係がないこととも相まって、同姓の家＝近隣の家＝組内という意識になったのであろう。

南永田における生活互助組織は講（上講・下講）－谷戸（組内）という構成であり、その谷戸の家々は同姓で、系譜関係の伝承もあるが、本分家という形での社会関係にはならず、互いに等量負担をする互助組織となっていた。これは五人組の区分と重なることが多かったことによっても強められたものといえる。

(4) 系譜関係の歴史的な存在形態

近世初頭以降家々の分立がおこなわれ、結果的には系譜関係が形成されたことは明らかであるが、その系譜関係は本家を中心として分家群との間に庇護奉仕の関係を結ぶという同族団としては存続してこなかったと思われる。現在の民俗に示された生活互助組織は、系譜関係にある家々は互いに等量の負担をすることで互助するという仲間としてあり、それが単なる系譜関係によって存在しているのではなく、むしろ近隣関係にあることで存在している。そのことは組内という表現に示されている。このような社会関係に帰結したのは、それらの家々間の庇護奉仕関係がこわれ、同族団が弛緩した結果であろうか。それとも家々の成立過程が必然的に形成した社会関係であろうか。もしも前者であれば、近世前期における家々の成立過程が同族団に帰結したことを明らかにし、それが後に弛緩した要因を考えねばならない。いずれにしても、家々の成立過程の中にその社会関係を規定する要因があるといえる。

すでに明らかにしたように、家々は分立過程に田畑・屋敷をほぼ均等に分け合って成立してきた。しかも、それが2世代にわたり2回も分割し、結果として1軒の家から短期間に4軒になることもあった。長者谷の広川姓の4軒はその典型であったし、川井姓の茂左衛門、佐次兵衛などの家々も同様であり、近年まで田畑が互いに接しているという形でその様相を残していたのである。均等分割ともいべき形で分立してきた2軒ないし3軒の家はそれぞれの家業経営において大きな差がなく、生産条件においても互いに同じようになるように耕地を配分しているのであるから、再生産のあり方もほぼ同じであった。したがって、分立した家の1軒が本家となって、他の家々を庇護し、逆に分家となった家は本家に奉仕することで依存しなければ維持できないという同族団の構造は家の成立の初発から形成されることはなかったと考えられる。先祖の祭祀を継承するという点では嫡系の家は存在したかもしれないが、社会的経済的意味をもつ本分家関係にはならなかったのである。分立した家は互いに等量負担して助け合う形となった。

ところが、現在みられるような家々の社会関係は近世の史料の中で直接みることはできない。ただ以上のような民俗を知った上で考えると、次の史料は意味をもってくるであろう。

証文之事

一今度御除之長者之森伐荒シ申ハニ付御僉儀之上御仕置可被成其旨御尤ニ存申分ケ無御座あやまり申ハニ付何茂頼入色々御詫言申ハヘハ御免圖存ハ自今以後右之森ニて竹木荳本も無左と伐申間敷ハ若少も荒シ申ハハ我等儀者不及申此加判之者追上様江被仰上何分之御仕置被成ハとも少も御怨申間敷ハ為其証文入置申ハ以上

元禄六酉ノ十二月
(1693)

主 伝兵衛㊦

証人 勘兵衛㊦

御名主百姓中

同 利兵衛㊦

同 兵三郎㊦

ごく平凡な詫び証文である。長者の森は長者谷の勘兵衛と利兵衛の屋敷の間にある。その木を勝手に伐採したということで伝兵衛が詫びを入れているのであり、それに3人が保証人になっただけのことである。従来だとそれだけで処理されてしまったであろう。しかし、証人になったのがどのような関係の人々であるかは注意されねばならない。この伝兵衛以下の4人は、今まで何回もみてきた、広川姓の4軒なのである。伝兵衛は①の家で、証人の3人は②, ③, 旧④である。すると、伝兵衛の不始末を一族で保証人になって詫びたということになるが、その文面や署名をみると一族であることはどこにも示していない。当時の文章では普通親類という言葉で一族あるいは同族関係を示しているが、これにはそれもない。また3人の証人の中での比重はなく、どれも同じ証人なのである。連帯責任を等量で負担しているのである。しかもこの伝兵衛以下4人だけでは五人組ではない。だから五人組の連帯責任によって保証しているのではない。系譜関係にある4人が仲間として互いに保証人になっているのであり、これは現在の生活組織のあり方と同じであるといえよう。

この広川姓の家々では、1軒の家の婚札には残りの家の中の年長者・経験者がジミョウとなって、その式の運営にあたる。このジミョウという言葉は地類、地親類、地組、相地等と同様の内容をもつ言葉であり、本分家関係を中心にした同族団とは異なる、特定の系譜関係にある家々を示すものとして南関東では一般的に使用されている⁽⁴⁸⁾。ここではそれが婚札の一定の役割に限定されているのであるが、それでも系譜関係にある家の中で相談して決めるという点では同族団でなく、ある程度相互関係にある仲間的な系譜関係の家のことになる。このジミョウという表現を文書の

5. 村落構成と互助組織

中でしている例はないが、次の証文に示されているアイ地には注目される。

入置申証文之事

一今度善左衛門相果い訳ケ御公儀様御注進可被成段御尤ニ存い此段乱気ニ而相果候得者病死同前之義ニ御座い故我等とも御注進之義強而御無用ニ被成被下い様ニ相願申い者御注進不被成其通り成被下恭奉存い此義ニ付如何様之義申出いとも我等とも何方迄茂罷出申訳仕少茂各々方へ御難儀掛申間敷い為後日仍而如件

享保八卯九月廿七日
(1723)

善左衛門 女 房㊦

同人遺跡 又右衛門㊦

当村同人弟 清五郎㊦

星川村同人聳 平八㊦

田中村同断 権八㊦

二又川村同人妹聳 八郎兵衛㊦

当村アイ地 忠左衛門㊦

森村善左衛門オイ 喜三郎㊦

この証文に署名したのは善左衛門の妻と跡とり（遺跡）の他、善左衛門の弟、娘の夫（同人聳）、妹の夫等、狂死した善左衛門と親族関係でつながる者である。その中でただ一人親族関係を示していないのが忠左衛門で、当村アイ地となっている。永田村に居住していたことは知られるが、どのような関係かは明らかでない。表現からすれば、アイ地という関係ということになる。このアイ地とは何であろうか。善左衛門と忠左衛門の系譜を探ってみよう。元禄9年の名寄帳によれば、この二人の田畑所持は表30のごとくであり、上田、中田においてはほぼ等しい規模を所持していることが判明する。この所持の様相をさかのぼってみると、延宝元年では善左衛門は又右衛門、忠左衛門は喜右衛門であったが、それぞれの所持の様相は中田、上畑、下畑、屋敷においてほぼ完全に等しい面積を所持している。このような分割はすでに万治年間になされていた。それは天正19年検地で雅楽之助の屋敷として130坪と登録されていたものが、万治2年（1659）の畑方割帳では2畝5歩ずつに分割されているのである。より具体的に分割の様相が判明する水田をみると表31のようになる。これによれば二人が中田の各筆をほぼ均等に分けている。以上により、この享保8年の証文に出てくる善左衛門と忠左衛門は天正検地の雅楽之助を継承した家であり、その分立は万治年間までに田畑・屋敷をほぼ等しく分割してなされたことが判明する。2軒になって60年も経過しているのである。当然この享保年間の2軒の家の当主の間は従弟や又従弟よりも疎遠になり、親子関係の連鎖によって認識できる親族関係はなかったと考えられ

表30 相地2軒の所持面積

元禄9年

延宝元年

		善左衛門	忠左衛門	又右衛門	喜右衛門
		反	反	反	反
上	田	1.6.00	1.5.28	2.1.10	1.5.28
中	田	1.1.02	1.1.28	1.1.02	1.1.28
下	田		7.26		7.26
新	下田	5.00	5.00	5.00	6.02
計		3.2.02	4.1.22	3.7.12	4.1.24
上	畑	2.19	7.11	5.00	5.00
中	畑	8.07	3.14	8.07	1.1.21
下	畑	6.24		3.12	3.12
屋	敷	1.15	2.25	2.05	2.05
新	下畑	6.01	6.04	1.9.16	2.0.05
新	畑	1.6.15	1.1.13		
計		4.1.21	3.1.07	3.8.10	4.2.13
合	計	7.3.23	7.2.29	7.5.22	8.4.07

表31 寛文10年の又右衛門と喜右衛門の水田の所持

内	か	中	反1.29	又右衛門	又右衛門	3筆	反
マ	マ	マ	1.28	喜右衛門			
マ	マ	上	2.1.10	又右衛門	喜右衛門	4筆	反
と	の	中	9.03	マ			
マ	マ	マ	1.0.00	喜右衛門			
も	り	上	1.5.28	マ	喜右衛門	4筆	反
西	谷	下	7.26	マ			

よう。しかし、密接な生活上の連関があったのであり、それがアイ地と表現された。アイ地は相地あるいは合地であり、田畑を均等分割して登場してきた家々の関係といえる。それは相互に手伝いをする生活互助組織であったろう。現在は婚礼にかぎって残っているジミョウという言葉と文書上のアイ地は同じものと考えてよいであろう。

系譜関係はある程度伝承されながらも、それが本家と分家の庇護奉仕の関係にならず、相互に等量の負担をする仲間の存在としてあるのは、その家の形成過程が田畑・屋敷をほぼ等しい量に分け合ったものであるからと推測される。この善左衛門と忠左衛門の例が示すように、相地と呼ばれ、2軒の関係であったかもしれない。しかし、その後の第2次分割があると、それも含めて互いに手伝いをする組織となった。これが現在の生活互助組織の出発であったと考えたい。長者の森盗伐の詫び証文に4名が連署していることはそれを証明している。

6. 結 語

南永田一講一谷戸という村落組織の序列がこの等量負担の系譜的關係を基底にしていたことは、村落そのもののあり方を規定したであろう。系譜意識も弱く、家格構成がほとんどみられない村として永田村を特色づけた。近世前期にあって、新田開発とか共有地の分割とかについて構成員がほぼ等しい権利をもったことや、分割後の山の維持管理について強い規制が全体の確認でなされたのもそれを示している。

6. 結 語

多摩丘陵の最南端で三浦半島へ続こうとする所の浸蝕谷に展開する永田における近世的な家と村落の形成過程およびその過程の中から生み出された社会関係をみてきた。それを要約すれば次の諸点になろう。

- ① 中世末の永田郷は服部帯刀を中心に8軒ほどの名主百姓と20軒ほどの小百姓が構成する村落であった。この小百姓の中には、名主百姓と請作関係にあるが、自立して経営をおこなっている小百姓と、名主百姓に支配され編成されている従属的小百姓があった。天正19年検地はこれら小百姓も名主百姓と同格の名請人として登録することにより、その支配関係を否認することを示し、近世村落へのスタートを切った。
- ② 天正段階およびそれ以降に各家が経営に内包していた奴隸的労働力である譜代下人は、わずかに水呑になるのが若干あるだけで、多くはそのままの状態で消滅を迎え、下人→百姓という自立へのコースを歩む者はほとんどなかった。17世紀末までに成立した60軒余の家は基本的には天正検地に登録された30軒ほどの家が田畑・屋敷を分割し合いながら登場させてきたものである。
- ③ この増加の過程の多くは田畑・屋敷をほぼ等しく分割し合う形でなされた。特に17世紀の中ごろから後半にかけてはほとんど完全に近い均等分割であった。田畑・屋敷をそれぞれ1筆ごとに等しく分け合って、生産条件を等しくするという方向で分割され、結果として総計においてほぼ等しい量の田畑をもつに至った。
- ④ 均等分割もしくはそれに近い形で成立してきた60軒余の家は1町歩前後の田畑を所持し、直系親族によって農業経営をしていた。この家々が構成する永田村には家格や特権的身分秩序は発達しなかった。
- ⑤ 村落としては北永田と南永田は別々で、それぞれ村落としてのまとまりをもっていたが、その内部には講組が存在した。南永田では上講・下講に2区分され、さらにその中が谷戸に分けられていた。この講と谷戸が生活互助組織として機能してき

- た。いずれも近隣関係に基づく組織といえる。
- ⑥ 近隣関係にある谷戸はまた同姓の家であり、系譜関係もある。しかし、1軒の家を本家とし、それとの社会関係で生活互助をするという同族団にはなっていない。組内とも呼ばれるように、等量の負担を相互にする仲間として存在する。
- ⑦ 系譜関係にありながら、それが本分家関係という同族団に帰結しなかった理由は、その成立過程における田畑屋敷のほぼ等しい分割にあったと考えられよう。現在婚礼にのみ使用されているジミョウという用語と同類のアイ地（相地）が近世文書の中で均等分割した2軒の家の関係を表示するものとして使用されているのである。
- ⑧ 家格、身分秩序のない村落機構、互いに等量負担をする生活互助組織を形成したのは近世前期、特に17世紀後半におけるこのような家々の均等分割に基づく家の分立過程であった。

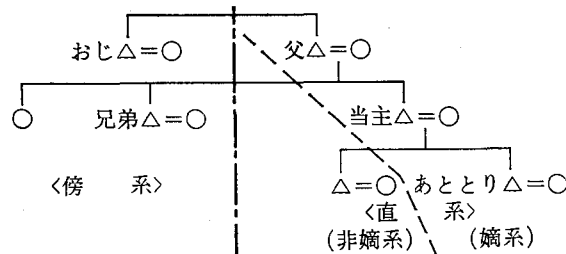
註

- (1) 安良城盛昭『幕藩体制社会の成立と構造』1959。
- (2) 佐々木潤之介『幕藩制の構造的特質』（『歴史学研究』245, 1960）、同「近世農村の成立」（『岩波講座日本歴史』近世2, 1963, 所収）、同『幕藩権力の基礎構造』1964等。
- (3) 安良城前掲『幕藩体制社会の成立と構造』214ページ。なお、安良城は「小農民」と表現し、「小農」とはいわないが、「小農民」と他の研究者の使用する「小農」と意味上の差はないと判断される。
- (4) 朝尾直弘『近世封建社会の基礎構造』1967。
- (5) 佐々木前掲「近世農村の成立」。ただし、後には佐々木の論から小農の「満面開花」は消える。佐々木『幕末社会論』1969参照。
- (6) 安良城盛昭「太閤検地をめぐる諸問題」（安良城前掲『幕藩体制社会の成立と構造』所収）、佐々木潤之介「江戸時代(-)」（遠山茂樹・佐藤進一編『日本史研究入門』II, 1962所収）。ただし、複合大家族の分裂による小農の成立を基本と主張する立場のあることも忘れてはならない。山田舜『日本封建制の構造分析』1958、大竹秀男『封建社会の農民家族』1962、大石慎三郎『近世村落の構造と家制度』1968、鷺見等曜『前近代日本家族の構造』1983等。
- (7) 藤田五郎『近世農政史論』1950、第4章（『藤田五郎著作集』2, 1970）、同『近世封建社会の構造』1951、第1章（『藤田五郎著作集』3, 1970）等。なお小族団的協業体は中村吉治によって初めて使用された語である（中村『日本社会史概説』1948, 参照）。
- (8) 宮川満『太閤検地論』I, 1959, 第3章, 第4章。同『太閤検地論』II, 1957, 第5, 第6論文。なお、族縁協同体は和歌森太郎が設定した概念である（和歌森太郎『国史における協同体の研究』1947〈『和歌森太郎著作集』1, 1980所収〉参照）。
- (9) 佐々木前掲「近世農村の成立」。
- (10) その点での努力がみられるのは堀口貞幸『近世南信濃村落社会史』1970、所理喜夫『徳川將軍権力の構造』1984、本篇第7章等である。
- (11) 青木虹二「17世紀の横浜農村」（『郷土よこはま』1-2, 1957）、同「小農民の自立について」（『社会経済史学』23-4, 1957）、同『百姓一揆の年次的研究』1966, 第2章, 等。なお、永田についてはすでにそれ以前に、浅香幸雄「近世期における宿付村落の発達」（『人文地理』8-4, 1956）がある。以上いずれも本稿と同じ服部家文書による分析であるが、本稿の諸統計表はすべて筆者が直接作成したものである。本稿が永田を分析対象とし

- たのは青木虹二の諸研究、特に『横浜市史』第1巻の記述とそこに示された諸表（本稿の表5、表15に対応する）および水田図に触発されたからであり、それらから多くのことを学んでいる。記して感謝の意を表したい。
- (12) 『風土記稿』は、長者墓の他に、高島墓というのも記述しているが、この両者ともその由来についてはまったく不明としている（『新編武蔵風土記稿』大日本地誌大系本4、1957、150ページ）。
- (13) 永原慶二『日本中世社会構造の研究』1973、高重進『古代・中世の耕地と村落』1975、木村礎『村の語る日本の歴史・古代中世編』1983等。ただしこのような散居型小村を中世村落の基本とする考えに問題があるという指摘に留意する必要がある。関口恒雄「中世前期の民衆と村落」（『岩波講座日本歴史』5、1975、所収）参照。
- (14) 『横浜市史』1、1958、350～351ページ。
- (15) 杉山博校訂『小田原衆所領役帳』（日本史料選書2）1969、182ページ。
- (16) 同上書243ページ。
- (17) 前掲『横浜市史』1、427～429ページ。
- (18) 杉山博・萩原龍夫編『新編武州古文書』上、1975、320～321ページ。
- (19) 同上書321ページ。
- (20) 『新訂寛政重修諸家譜』8、1965、306～307ページ。
- (21) 前掲『新編武州古文書』上、321ページ。
- (22) 同上書322ページ。
- (23) 前掲『横浜市史』1、534ページ。
- (24) 検地帳の地積は大・半・小で表現されている。その大・半・小は中世の1段＝360歩のものでなく、太閤検地の原則による1反＝300歩であり、したがって大＝200歩、半＝150歩、小＝100歩で計算されている。以下、本稿では、以降の地積との比較に便利のため畝歩になおして表記する。なお、徳川家康の関東入国に伴う天正18、19年の検地では、1反＝300歩で畝歩制を採用しているが、相変らず大半小を用いることが多かったようである。神崎彰利『検地一繩と竿の支配』1983、135～148ページ参照。
- (25) 「宝暦9卯4月村差出シ帳」
- (26) 同上
- (27) 前掲『横浜市史』1、488～489ページの第1表による。なお、久良岐郡から西に山を越えた相模国鎌倉郡では上田の石盛が15という所が何か村もあり、生産力の違いを示している。
- (28) 古島敏雄『土地に刻まれた歴史』1967、宮本常一『開拓の歴史』1963、等参照。
- (29) A・Bグループ以外にも武士的名前をもったものはいる。Cグループの兵庫、Eグループの但馬、右近、雅楽之助であるが、これらがどのような性格の百姓であるかは明らかにしえない。とくに、Eグループの3人はその耕地の名請状態からみれば、Eグループの他の者と変わりなく、武士的名前をもつ理由は分からない。ただ、雅楽之助はその屋敷の記載順と耕地の配置状況から帯刀と何らかの関係のあった者と推定される。
- (30) この40人という人数の判定は次のようにした。名前として登場する総人数は58人であるが、そのうち連名で登録しているもの、田畑のどちらかを連名としているもの、田と畑が別名になっているが、天正検地帳や次の延宝の登録状況から判断して同一人もしくは同一家と思われるものはいずれも1軒として扱い、それを差し引いたのが40人である。この中で、田畑で名前が違うのは、田が承応2年(1653)、畑が明暦2年(1656)の数字で、その間に3年間あるためと思われる。
- (31) 『風土記稿』によれば、民戸57で、他に寺が2あるので、計59軒となる（前掲同書148ページ）。また明治3年の戸籍帳は66軒とする。
- (32) この近世後期の動向についてのごく簡単な分析を浅香前掲論文および前掲『横浜市史』1がしており、その様相について教えてくれる。

- (33) 有賀喜左衛門『日本家族制度と小作制度』（『有賀喜左衛門著作集』1・2, 1966）以下の有賀の諸研究を参照。

- (34) ここで使用している親族関係の用語について図示化して、説明をしておく。



従来は直系親族と傍系親族に簡単に区別する傾向があり、当主の子供をすべて直系親族として把握してきた。しかし、家は、一子残留の原則に基づき、一人の子供のみによって継承されて行き、他の子供はその家内では継承権をもたない。その違いを嫡系と非嫡系として区別することが必要であろう。この区別はとくに子供たちが成人してから大きな意味をもつ。

- (35) 従来は家の形態を把握するのに無規定に大家族・複合家族・小家族等が使用される傾向があった。これらの用語は家族論としては使用しえるかもしれないが、家業経営体としての家の形態区分としては使用できない。ここでは有賀喜左衛門の用語（同『日本の家族』1965, 99ページ）を採用し、それを次のように規定する。単一の家は嫡系のみが夫婦関係をもち、他の非嫡系や傍系のものを成員として含むときには独身の状態であるような家であり、複合の家は嫡系のみでなく、非嫡系や傍系の成員にも夫婦関係を含みうるような家をいう。
- (36) 家族の成員数とその構成が周期的に変化することは、すでに社会学や経済学で「家族周期」の問題として研究されているが、これは家の問題においても同様のことがいえる。家の成員数やその構成の周期的変化を考えた上で、家の外からの労働力の導入のあり方を検討せねばならないであろう。なお、家族周期については森岡清美「家族の構造と機能」（『講座社会学』4, 1957, 所収）、小山隆「家族形態の周期的変化」（喜多野・岡田「家—その構造分析—」1959, 所収）、岡村益「家族周期と生活構造」（『社会学講座』3, 1972, 所収）参照。なお、小山論文は近世後期の甲州山村の宗門人別帳を史料として分析したものであり、参考になる。
- (37) 近世前期における家の構成は恐らくどこにおいてもこのようなものであったろう。複合家族とか大家族といわれるものは、飛騨白川郷のような特別な要因によって形成されたものか（児玉幸多『近世農村社会の研究』1951 参照）、宗門人別帳の記載の固定化による見かけの構成だと考えられる。畿内の農村において、家の成員数の階層による差は下人の数によってもたらされていることはすでに朝尾直弘が明らかにしている（朝尾前掲『近世封建社会の基礎構造』72～76ページ）。
- (38) 浅香前掲論文参照。
- (39) 佐々木潤之介「幕藩体制下の農業構造と村方地主」（古島編『日本地主制史研究』1958, 所収）、安良城前掲『幕藩体制社会の成立と構造』第7章、山口徹「封建社会における雇傭労働」（市川・渡辺・古島他『封建社会解体期の雇傭労働』1961, 所収）、佐々木「16～7世紀における『小農』自立過程について」（大阪歴史学会編『幕藩体制確立期の諸問題』1963, 所収）等。
- (40) この補助的手段として利用できるのに、寛文10年（1670）の「小検見帳」というのがある。これは、水田のみであるが、天正検地の田の1筆ずつに対応して寛文期の名前が記載されていて、分割されたものについてはそれぞれの面積に分けられているので、その規模がはっきりしている。これにより承応の割付帳につなげることができる。

- (41) 二郎吉は寛文年間には次右衛門と出てきており、天正検地帳に出てくる後筆の名前にも次右衛門があり、つなげることができる。
- (42) 古島前掲『土地に刻まれた歴史』、香月洋一郎『景觀のなかの暮らし』1983等参照。
- (43) 元禄9年は名寄帳によるので、この分割の結果さらに耕地の配置が錯雑するにいったかどうかは知りえないが、寛文期の様相および現在の聞き書きによれば、水田を交互にもっていたと考えてよいであろう。
- (44) 青木前掲「小農民の自立について」参照。
- (45) 前掲『風土記稿』4, 149ページ。
- (46) 同上書同ページ。
- (47) 白幡神社は久良岐郡には比較的多くある神社である。ここの白幡神社は女の神様をまつと伝えているが、その内容は不明である。
- (48) これらの言葉の分布とその内容については加賀ひろ子「同族結合についての一考察」(『民俗学評論』1, 1967), 高橋泉「神奈川県のシルイ」(『常民文化』4, 1981) 参照。

付記 服部家文書の閲覧にあたっては、横浜市史編さん室(当時)の石井光太郎, 東海林静男の両氏に何かとお世話になり, またご教示をえた。永田での民俗調査では南永田の多くの方々にお話をうかがった。記して感謝申しあげたい。

(本館 民俗研究部)